

今に生きる日本の住まいの知恵

わが国の気候・風土・文化に根ざした、現代に相応しい住まいづくりに向けて



日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会
(事務局 公益財団法人日本住宅総合センター)



(写真：①)

公益財団法人 日本住宅総合センターでは、平成 23～24 年度に、学識者・有識者から成る委員会「日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会」（主査：小林秀樹千葉大学大学院教授）を設置して、国土交通省住宅局住宅生産課木造住宅振興室の協力の下、伝統的な木造住宅などに用いられている技術・手法や住まい方の合理性に関する調査検討を実施してきました。この度、調査検討の成果をもとに、現代の住宅づくりに

おいて参考になり得る情報を「今に生きる日本の住まいの知恵～わが国の気候・風土・文化に根ざした現代に相応しい住まいづくりに向けて～」として取り纏め、一般に公開することとしました。

住宅の建設・取得を検討している一般ユーザーの方や、住宅の設計・建設に携わっている事業者の方などが手に取られ、住まいづくりの参考にして下さることを期待しています。

目次

序 本稿の目的と構成

0.1 目的	2
0.2 対象としている住宅	3
0.3 利用方法	4
0.4 構成	4

1章 日本の住まいの知恵とは

1.1 日本の住まいづくりの立脚点	6
1.2 住まいづくりの目的	8
1.3 日本の住まいの要素	10

2章 住まいづくりの目的と対応のしかた

2.1 人と人との関係を守り育てる	14
2.2 日々の暮らしを楽しむ	18
2.3 心地よく環境にやさしい生活を支える	22
2.4 外的環境から建物を保護する	26

3章 日本の住まいの要素

3.1 屋根・軒	31
3.2 外壁	33
3.3 開口部	34
3.4 内部建具	38
3.5 内部空間	40
3.6 ゆか	42
3.7 内部意匠	44
3.8 装い	45
3.9 素材	47
3.10 戸外	48
3.11 配置	50

参考文献一覧

奥付



(写真：⑦)



(下写真2点：①)



●本編に掲載の写真・画像の出典および提供者
(各写真・画像に番号を記載)

- ① 季刊『チルチンぴと』(風土社)
- ② 積水ハウス
- ③ 野村不動産
- ④ ミサワホーム
- ⑤ 片山和俊(設計)・木寺安彦(写真)
- ⑥ 阿部利広/阿部建築研究室
- ⑦ 古川保/古川設計室
- ⑧ 柴田裕弘/GA開発研究所
- ⑨ YKK AP
- ⑩ 一般社団法人日本襖振興会
- ⑪ 全国建具組合連合会

記載なき写真・画像はアルセッド建築研究所が提供。
記事、写真、図版等の無断転載を禁じます。

序 本稿の目的と構成

0.1 目的

わが国の伝統的な木造住宅は、柱・梁などによって構成される軸組構法を基本とし、和室、縁側、真壁、土壁といった、地域の気候・風土・文化に根ざした空間・意匠、構法・材料などの、住まいづくりの知恵がふんだんに盛り込まれています。こうした住宅には、例えば、大きな開口部を確保して通風・採光に利用する、勾配屋根や軒・庇により降雨や日射遮蔽への対策を講じるなど、現代の住宅にも適用しうる環境親和型の技術が用いられており、電力をはじめとするエネルギー需要の抑制が課題となっている昨今においては、一層再評価されるべきものと考えられます。

また、伝統的な木造住宅には、様々な機能や用途に使える部屋や空間が設えられ、多様な生活の器として機能していました。例えば、土間は農機具や漁具を手入れする作業場として、また、座敷は客を迎え入れる部屋として使われていました。また、畳の間は色々な用途に転用が可能です。

こうしたかつての住まいの多面的な機能は、当時の社会生産体制を背景に形成されていたと言えるものの、住生活の多様さを許容し豊かさを創出していた面もあったと想像されます。それに対して現代の多くの住宅では、かつての住宅内にあった機能の多くが外部化し、主に食事や就寝などの基本的な生活行為を行うための場で構成され、それ以外の用途には利用しにくくなっています。

平成24年に内閣府が実施した世論調査（国民

生活に関する世論調査（平成24年6月）では、「今後の生活において心の豊かさに重きをおきたい」と回答した人の割合が全体の64%であり、上昇傾向にあることが確認されました。現代において住生活をより豊かにしたいとする指向は増えていると考えられ、それを実践する上で、かつての住まいの構成や設えから学ぶべき知見は多くあるものと考えられます。

本稿では、こうしたことを背景に、かつての日本の住まいに取り入れられていた手法・技法や営まれていた住まい方を再確認し、現代における住まいづくりに参考になる考え方や技術的な内容を整理し紹介します。それらを現代において活用するためには、従来の手法・技法を現代の住まい手の指向、流通材料、生産体制、法令、コストなどの諸条件に見合うように、改変して取り入れる知恵や工夫も必要となります。そのため、本稿では、最近建設された住宅や現代の生産者の動向にも着目し、かつての住まいにみられた手法・技法を採用する方法、また、採用を可能にするための前提条件などについても示しています。

かつての日本の住まいには、住まいを長寿命で心地よくしようとする工夫、多様な住まい方を許容し豊かなものにしようとする工夫が見られます。それらを現代の住宅づくりにおける条件下で活用する試みを「日本の住まいの知恵」と称して、本稿はその実践に向けた情報を提供します。

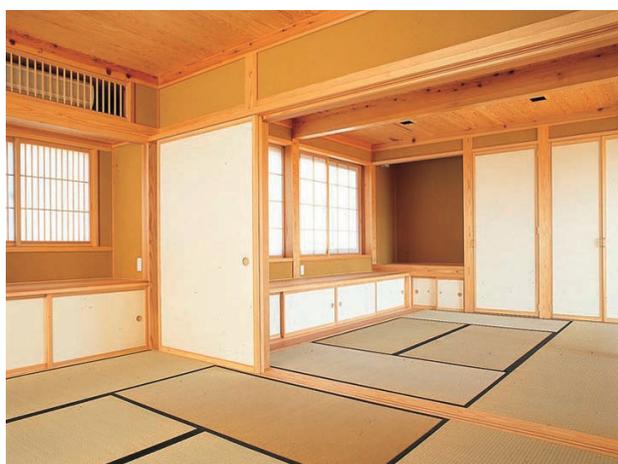
伝統的な木造住宅にみられる要素の例



勾配屋根・瓦屋根（富山）



深い軒・縁側・すだれ・掃き出し窓（熊本）



和室・続き間・襖・障子（山形）



防風林・瓦屋根（鹿児島）

0.2 本書が対象としている住宅

わが国は、地域によって気候、歴史・文化や産業構造などの特性が異なります。

そのため、伝統的な住宅では地域ごとに特徴のある形式・形態や材料・構法が使われ、各地で特色のある住宅がつくられてきました。例えば、寒冷地や蒸暑地では温暖地に比べて、寒さや蒸し暑さに対処する工夫が手厚く講じられています。

本稿では、こうした各地で用いられ継承されてきた要素を取り上げています。

また、現代においては一戸建て住宅以外に、とくに都市圏ではマンションなどの需要も高いことから、一戸建て住宅に適用できるものに限定せず、集合住宅に適用しうる要素も取り上げています。

このように本稿では、特定の地域や住宅の建て方に限定しないで、できるだけ幅広く住まいづくりに関する諸要素を取り上げ紹介します。ただし、要素のなかには地域の実情や建て方に応じて選択が必要になるものもあります。

利用方法

本稿は、これから住宅の新築、購入や改修を検討しようとする一般のユーザーの方の参考書として、あるいは、工務店や住宅メーカー、素材生産者などの住宅生産に関わる事業者のユーザーへの情報発信ツールやユーザーとの情報共有ツールとして、利用していただくことを目指しました。

そのため、日本の伝統に根ざした住まいづくりの手法・技法とそれを用いた住まい方の事例を中心に構成し、具体的で分かり易い内容とすることにつとめました。事例は、伝統的な木造住宅だけでなく、現代の住宅において工夫して用いられているものも含めて、できるだけ幅広く集めています。

構成

1章 日本の住まいの知恵とは

「自然環境」「社会的環境」「家族」の3つを住まいづくりで重視すべき立脚点として位置づけ、それらに対応して「住まいづくりの目的」（与条件）を設定しています。また、目的を達成するための手法・技法などを「日本の住まいの要素」として整理しています。

2章 住まいづくりの目的と対応のしかた

住まいづくりの目的として、「人と人との関係」

「暮らしの楽しみ」「環境へのやさしさ」「建物の保護」の大きく4つを設定しています。これらの目的を達成するための住まいづくりの配慮点について、関連する要素の事例やその効果などを含めて解説します。

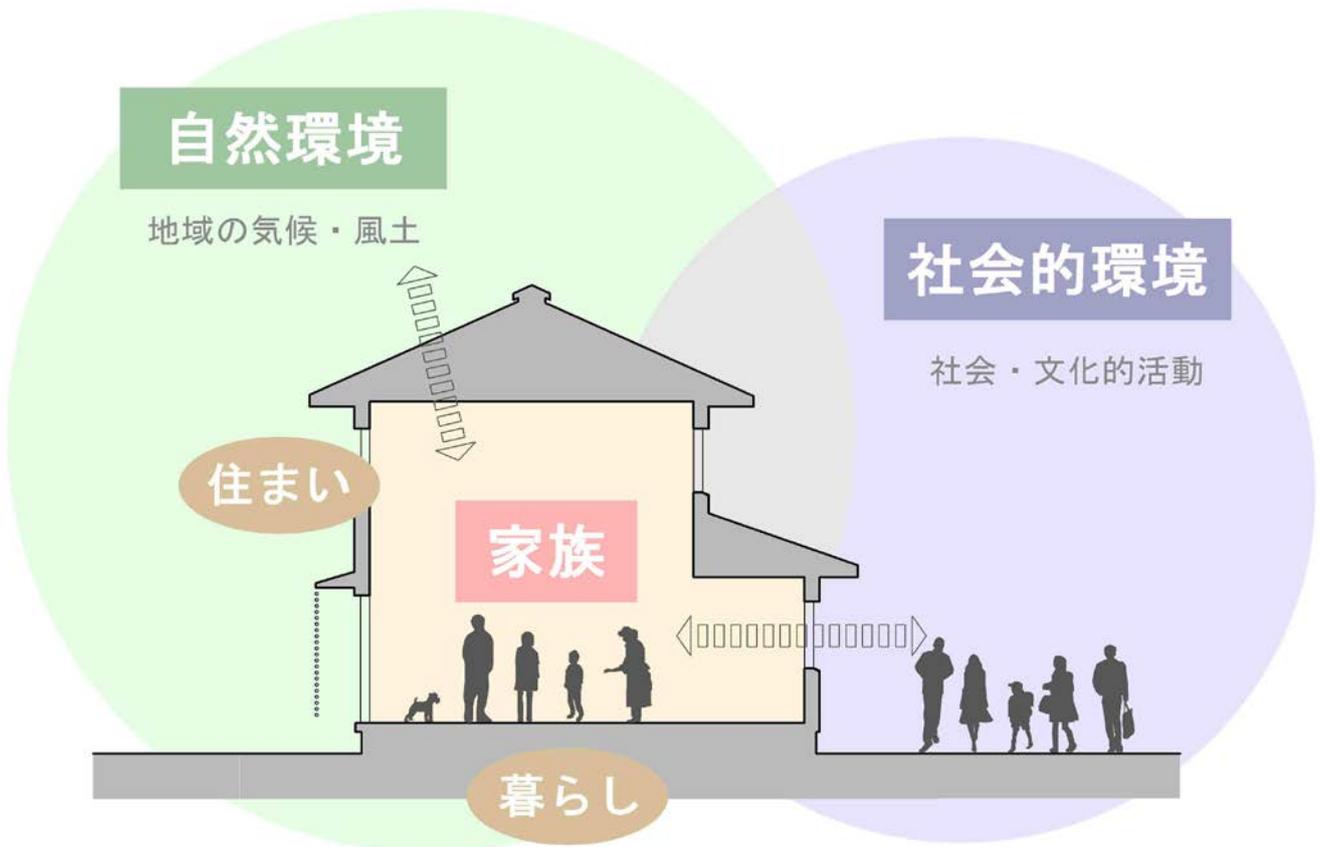
3章 日本の住まいの要素

日本の住まいの要素を36種類取り上げ、それぞれについて、採用のメリットや採用する上での留意点などを、事例を交えて解説します。

1章 日本の住まいの知恵とは

「自然環境」「社会的環境」「家族」の3つを住まいづくりで重視すべき立脚点として位置づけ、それらに対応して「住まいづくりの目的」（与条件）を設定しています。また、目的を達成するための手法・技法などを「日本の住まいの要素」として整理しています。

1.1 日本の住まいづくりの立脚点



図／日本の住まいづくりの立脚点＝「自然」、「社会」、「家族」

住まいを形成する基盤となるもの —自然、社会、家族

住まいと住まい方は、従来から、地域の気候に代表される「自然環境」と、これに順応して活動する人間が築いた「社会的環境」および住まいの利用主体である「家族」の構成や関係、の相互作用によって形成されてきました。

伝統的な住宅においては、第一の寒暖・湿度・雨・風・雪・地震・地形その他の「自然環境」は、例えば屋根の形やそこに用いられる材料、床の高さなどの住まいの形式に影響を与えてきました。第二の都市や農村といった「社会的環境」とその共同体の下で営まれる活動には、^{なりわい}生業^(※)、教育、慣習、娯楽、宗教などの様々のものがあり、住まいの間取りや住まい方に対し特に影響を及ぼしてきました。第三の「家族」の形態や役割は、

近代以前においては序列に基づく家族関係が重視され、住宅の間取りや住まい方に関して序列や格式・作法といったことが重視されていました。

現代において住まいと住まい方を考える際も、自然環境、社会的環境と家族（この二つは歴史的に著しく変容しましたが）は、従来と同様、その在り方を方向づける重要な条件であると考えられます。本稿では、この「自然環境」、「社会的環境」および「家族」が住まいとその暮らしを成り立たせている基盤となるもの、すなわち立脚点と位置づけます。

^{なりわい}※「生業」：生計を立てていくための職業。家業。

自然、社会、家族に対する、かつての日本の住まいの対処法

わが国の国土は南北に長く、北海道・東北や山間部などには寒冷な気候、関東以西には温暖な気候、九州や四国の南部などには蒸暑な気候の地域が分布しています。同じ気候帯の地域でも沿岸部、内陸部、山間部といった区域や地形などの特性の違いにより、気候は多少相異なることがあります。わが国の各地には、このように特徴あるそれぞれの気候特性に呼応する形で、気象要素を制御あるいは利用するための様々な工夫された住まいの形式や形態が見られます。例えば、雨量の多い地域においては、勾配屋根や深い軒庇を設置して雨水を速やかに確実に外部に排出したり、板壁で外壁や躯体を保護したりするなどの工夫が一般的に行われてきました。

また、わが国の庶民住宅では社会生産体制を反映して、古くから生業の場を含んだ形式の間取りが成立し継承されてきました。そこでは例えば、出入口、土間（ニワ）、座敷、台所、納戸、奥の間といった部屋によりオモテとウラの対比

で構成され、生業や接客・冠婚葬祭など対外的な用途の空間とそれに対する家族生活を中心とした用途の空間が並立し、意匠や設えに様々な工夫が施されていました。

また、社会と密接な関係性を持っていたために住生活の営みは序列が尊重され、例えば、床には土間、板の間、畳の3種類があって、それらは隣り合って設けられていましたが、そこでの行動や用い方に規範を与えていました。このように住戸内で多様な生活や行動を許容するために、住まいを適切に構成し、設えようとする知恵や工夫が培われ、長い間受け継がれてきたものがあります。

かつての日本の住まいの対処の現代における意味

昔からあまり変わる事のない自然環境に対する、現代の住まいにおける対処法は、かつての住まいの工夫からその多くを学ぶことができると考えられます。また、かつて工夫して用いられていた方法以外に、現代的な工法や材料・製品などを用いて、同様の効果を得られるものもあると考えられます。

一方、社会的環境や家族の関係・役割の著しい変化により、かつて住宅と一体であった生業の場や空間の序列化は、現代の住まいでは多くの場合必要とされなくなり、家族および個人の生活への対応が主題となってきています。しかし、かつて庶民住宅で用いられていた社会や地域・近隣との関係に呼応するために配慮された

種々の工夫のなかには、人間関係など心の豊かさを育む上で参考になるものもあると思われます。とくに住まいの機能が限定されてきている現代において、生業、人の招き入れ、趣味など、多様な機能に対応していたかつての住まいの構成や設えは、示唆を与えてくれるものと思われます。

1.2 住まいづくりの目的

わが国の自然環境に呼応し、かつ、社会的環境や家族関係の変化の中で日本の住まいは形成され、受け継がれ、進展してきました。この自然、社会、家族に対し培われた住まいの知恵を再確認することを通して、これからの住まいの目標像を色々とイメージすることができます。

本稿では、そのような住まいづくりの目標像を「住まいづくりの目的」として設定しています。住宅を建設・取得しようとする一般のユーザーの中には、どのような目標をもって自らの住まいづくりに取り組むべきか判らないでいる方も多くいると考えられます。本稿で設定する「住まいづくりの目的」は、ユーザーが住まいづくりで何を重視すべきかを検討する際に、指針として用いることができます。

本稿では、住まいづくりの立脚点である自然

環境、社会的環境および家族への対処という観点から、次の〔1〕から〔4〕までの4つを、「住まいづくりの目的」と位置づけて、特に重視します。

〔1〕人と人との関係を守り育てる、〔2〕日々の暮らしを楽しむ は、社会的環境や家族関係の中で人が豊かに成長していくために大切にしてきたこと。

〔3〕心地よく環境にやさしい生活を支える、〔4〕外的環境から建物を保護する は、自然環境に調和して長期間継続して住まうために不可欠であったことと捉えることができます。

この〔1〕から〔4〕の「住まいづくりの目的」について、それぞれ具体的な目的を設定しています。

それらの内容と効果、および、関連する日本の住まいの要素を、以下に示します。

〔1〕人と人との関係を守り育てる

人を迎え入れ、ともに集う

暮らしは「社会」のなかで営まれ、人と人との関係の中で成立しています。住まいに交流の場を設けること、人との関わりに配慮した設え

を施すことは、社会的な生活を育み、住生活のみならずそれをとりまく地域社会を豊かにしていくことにつながります。

- 来訪者を気持ちよく迎え入れる : 植栽、前庭、玄関、格子、建物配置
- 集いをうながす : 続き間、縁側、土間、濡れ縁

家族が見守り合い、成長する

「家族」の生活や成長の器としての住まいのつくりは、家族相互の関係に少なからず影響を及ぼします。

家族がお互いに心を配り、尊重し合う関係の形成に寄与するような住空間や各部のつくりが大切となります。

- 家族の集いをうながす : 畳（和室）、板の間、土間、囲炉裏
- 家族の気配や様子を感ずる : 襖、引戸、障子、続き間、吹抜け、畳（和室）

〔2〕日々の暮らしを楽しむ

暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう

住まいは食事、就寝など基本的な生活行為の場であると同時に、「社会」の中で形成されてきた文化的な様々な行為や活動を楽しめる場でも

あります。そのような場を住まいのなかに形成することは、日々の暮らしに豊かさ、深み、緊張感などを与えます。

- 和の意匠を味わう : 瓦屋根、漆喰壁、板壁、畳（和室）、真壁、格子、障子、襖、引戸、大黒柱、自然素材・地域産材
- 趣味を実践し楽しむ : 畳（和室）、土間、板の間、続き間、床の間
- 思い出を受け入れ、心を落ち着かせる : 仏壇・神棚

自然の変化やその風合いを感じとる

「自然」とのふれあいは、私たちの気持ちに落ち着きや潤いを与えてくれます。住まいのなかに、自然を感じられる空間を形成する、自然の

素材を活用してその変化や風合いを楽しめることは、日々の暮らしに一層の彩りを添えてくれます。

- 自然の素材を味わい、継承する : 瓦屋根、土壁、漆喰壁、板壁、襖、引戸、障子、畳（和室）、板の間、自然素材・地域産材
- 四季の変化を感じ、楽しむ : 植栽、前庭、坪庭・中庭、掃き出し窓、地窓
- 光を採り入れる、制御する : 高窓・天窓、深い軒、障子、日除け（すだれ・よしず）、地窓

〔3〕心地よく環境にやさしい生活を支える

夏の快適、涼やかな生活に寄与する

夏期の高温・多湿な気候に対して、日射の遮蔽や自然風の活用による採涼は、従来から住まいに工夫して用いられてきました。

夏期や中間期の「自然」を制御し活用することは、生活時の省エネルギーにも寄与します。

- 自然の風を取り込み涼感を得る : 掃き出し窓、高窓・天窓、地窓、越屋根、格子、続き間、吹抜け、襖、引戸、欄間、坪庭・中庭
- 日射を遮り室内への流入を抑える : 深い軒、日除け（すだれ・よしず）、窓庇、障子、植栽

冬の快適、あたたかな生活に寄与する

冬期の低温な気候に対して、日射熱の活用や熱の調節による採暖は、夏の対策ほど意識されてこなかったものの、かつての住まいのなかに効果が得られる要素もあります。

それらを工夫して用い、冬期の「自然」を制御することは、暖房エネルギー消費の削減にも寄与します。

- 熱移動を調節し寒さを緩和する : 縁側、雨戸、障子
- 日射熱を集め蓄えて暖かくする : 掃き出し窓、土間、土壁、自然素材・地域産材

〔4〕 外的環境から建物を保護する

家をいためる自然の力を和らげる

強い雨風、大雪、高い湿度といった「自然」の環境要素は、それが長期間にわたり過度に建物に作用すると、建物を傷める要因となるおそれがあります。

各部のつくりや材料の使用法に工夫をこらし、地域の気候風土のなかで長寿命な住宅とすることが大切です。

- 風雨から建物を守る : 勾配屋根、瓦屋根、深い軒、板壁、漆喰壁、窓庇、雨戸、植栽、建物配置
- 湿気から建物を守る : 真壁、自然素材・地域産材、畳（和室）、高窓・天窗

1.3 日本の住まいの要素

「住まいづくりの目的」を達成するためには、建物の形式、材料・構法、空間構成などの様々のハードな要素と、住まいを維持・管理し活用するためのソフトな方法、の両面を的確に用いることが必要です。

本稿では、このうちハードな要素を「日本の住まいの要素」と称して、その手法・技法を取り上げます。単に伝統的な木造住宅に用いられた手法・技法のみを取り上げるのではなく、現

代の住まいづくりにとって有用で、かつ一般的にも適用可能な手法・技法に着目します。

日本の住まいの要素は、次表の通り、部位・つくりで分類し、36種類を取り上げます。これらの日本の住まいの要素を、自然、社会、家族などに関する個々の条件下で上手く取り入れて活用することこそが、「日本の住まいの知恵」であると言えます。

表／日本の住まいの要素

部位・つくり	要素名	機能・効果など
屋根・軒	1 勾配屋根	雨水排出の容易性・即時性向上
	2 瓦屋根	長期の耐久性（塩害防止）向上、部分補修可能、断熱性向上
	3 越屋根	通風・換気、採光
	4 深い軒	耐久性向上（雨・風・雪）、日射遮蔽、軒裏反射の導光
外壁	5 板壁	落ち着いた外観、部分補修可能、材料調達が容易
	6 漆喰壁	防水性・防火性向上、日射を反射、補修・修繕が容易（重ね塗りが可能）
開口部	7 高窓・天窗	採光・通風と防犯の両立、高低差を活かした通風性能向上（排熱）
	8 地窓	採光・通風・換気（床に近いレベル）、戸外の鑑賞
	9 掃き出し窓	採光・日射取得・通風、人の出入り、塵埃の掃き出し
	10 窓庇	防水上弱点となる開口部廻りの保護、日射遮蔽
	11 日除け（すだれ・よしず）	日射遮蔽、まぶしさの制御、通風、視線のコントロール
	12 格子	視線のコントロール、防犯、通風、日射遮蔽、まぶしさの制御
	13 雨戸	防雨、開口部の保護、防犯
内部建具	14 襖	室の仕切り・つながり、収納扉、装飾
	15 引戸	内部通風性能の向上、強風時の安全性、空間のつながり
	16 障子	日射遮蔽、日照調節（光の拡散）
	17 欄間	室内間の通風効果、採光（導光）
内部空間	18 続き間	多目的性（冠婚葬祭など）、間仕切りの容易性、廊下面積の節約
	19 縁側	熱的な緩衝空間、空間の拡がり、内外の中間領域、動線
	20 玄関	住宅の出入口、上下足の履替え、格式の表現、多目的な土間
	21 吹抜け	空間の開放性、採光、通風（ドラフト効果）、上下階のコミュニケーション
ゆか	22 畳（和室）	室利用の多目的性・転用性、吸放湿性、柔らかい感触
	23 板の間	温かみ・柔らかみのある触感、作業性、補修が容易
	24 土間	多目的性（戸外的利用）、作業性、接触感、蓄熱性
内部意匠	25 真壁	躯体現し（耐久性向上）、和の意匠の演出（木と塗り壁）
	26 大黒柱	家のシンボル・中心性、構造安全性
装い	27 床の間	和の空間の演出、季節感の演出
	28 仏壇・神棚	住まいにおける家族の心のよりどころ、季節の節目の明確化
	29 囲炉裏	家族の団らん、採暖
素材	30 土壁	吸放湿性、蓄熱性、防火性、地震力に対する粘り強さ
	31 自然素材・地域産材	健康性、自然循環、経年美化、地域経済の活性化
戸外	32 濡れ縁	庭と室内の行き来、戸外生活
	33 坪庭・中庭	自然との親和、採光・通風・換気
	34 植栽	防風・導風、日射遮蔽、美観・修景
	35 前庭	コミュニティ形成、ご近所づきあい、子供の遊び場
配置	36 建物配置	防風・導風、採光・日射遮蔽、近隣との協調

A traditional Japanese interior scene, likely a dining or meeting area. It features a dark wooden table, several chairs with light-colored cushions, and a large, multi-paned hanging lantern. The background shows a window with a grid pattern and a wall with a small light fixture. The overall atmosphere is warm and traditional.

2章 住まいづくりの目的と対応のしかた

住まいづくりの目的として、「人と人との関係を守り育てる」「暮らしの楽しみ」「環境へのやさしさ」「建物の保護」の大きく4つを設定しています。これらの目的を達成するための住まいづくりの配慮点について、関連する要素の事例やその効果等を含めて解説します。

2.1 人と人との関係を守り育てる

人を迎え入れ集う

来訪者を気持ちよく迎え入れる

☞ 植栽 前庭 玄関
格子 建物配置

住まいはその場所に存在している間、様々な人が訪れ、その前を往き来します。住まいを訪れる人が気持ちよさを感じたり、その前を往来する人が落ち着きや安心を感じられるよう、住まいの外観や玄関構え、門塀、垣、庭等のつくり配慮することが大切です。

通りに面する花木や生垣等の「植栽」は、道を行く人の目を楽しませてくれます。開放的で、すこしゆとりのある「前庭」は、近隣の方とおしゃべりの場ともなります。「玄関」は日本の伝統的な習慣である履き替えの場ですが、ここを明るく、ゆとりのある空間とすることで、訪れる人に心地良さを感じさせます。玄関から続くホールに「地窓」を設けて庭の緑が望める

ようにする工夫等も、自然の潤いを感じさせる効果があります。

かつての都市の住まいでは、通りに面して「格子」が設けられていましたが、これは風を通しつつ外部からの視線を制御してプライバシーを確保する工夫です。同時に直線で構成される美しく細やかな意匠は、通りから見て閉鎖的な印象を感じさせません。格子は祭りのとき等には外されて、内が外に開放される使い方もされたようです。閉じて断つ、開いて入れる機能を使い分けるその方法は、身近な他者に配慮しながら暮らす上での知恵の現れと言えるでしょう。



落ち着いたゆとりのある玄関ポーチ、玄関の正面は地窓を通して庭の緑を感じられる（写真：①）

通りから建物までに引きをとり、緑の庭木のあるアプローチをしつらえ、来訪者をお迎える（写真：①）



京町屋の通りに面した格子は視線の制御と内外のつながりを両立、祭りのときは取り外される

玄関の土間部分にちょっと腰掛でき、来訪者とおしゃべりできる（写真：④）



集いをうながす

☞ 続き間 縁側
土間 濡れ縁

住まいでの人と人の交流には、子育てや趣味、地域のボランティア活動等を通じて知り合った友人や仲間、学生時代から付き合いの続く友人、職場の同僚等との交流があります。最近ではホームパーティやガーデンパーティ等、住まいの身近なところで、家族以外の人々と集う機会が増えてきました。

住まいのなかに人が集いやすい場を形成するためには、ゆとりがあり融通性の高いスペースや自然を感じられる心地よいスペースが有効です。「続き間」（広間）は間仕切りを上手く使い、大人数から小人数の集まりまで色々な目的に柔軟に対応できます。かつての日本の住まいには、この続き間と戸外（庭）のあいだに、板

敷きの「縁側」が設けられていました。「縁側」は通路以外に広間の補助的なスペースとして使えるとともに、戸外の自然環境をうまく引き込んで心地よい室内環境をつくりだします。

また、創作やアウトドア等の趣味の活動を家族以外の人々が参加して一緒に実践できる場として、室内と戸外とのあいだに「土間」を、また、戸外に「濡れ縁」（デッキ）等を設けることも有効です。これらの境界部分の建具を全開放できるようにする、床の素材を工夫すること等により、活動の楽しさは膨らみ、新たな展開にもつながることでしょう。



庭に面する明るい縁側状の広間で、友人家族を迎えて、子どもと大人が食事をともに楽しむ（写真：①）

集合住宅の共用庭にテーブル等が置かれ、入居者同士や家族が使える場を形成している（写真：③）



板の間と畳の間の続き間はホームパーティや趣味等多用途に利用できる（写真：①）



部屋と庭のあいだの土間スペースは、人と人との集いの中心の場となる（写真：①）



屋外のウッドデッキで、友人らとともに、自然を感じながら食事を楽しむ（写真：①）

2.1 人と人との関係を守り育てる

家族が見守り合い、成長する 家族の集いをうながす

☞ 畳(和室) 板の間
土間 囲炉裏

家族が住まいの中で集い過ごす方法は、家族の構成や年齢によって様々です。かつての日本の住まいにみられた「畳」「板の間」「土間」「囲炉裏」等は、現代にも取り入れることができ、家族の集いをいざなうでしょう。

「畳」は弾力性や保温性を備え、空気の調湿作用をもっています。畳の間は、乳幼児を安心して休ませることができるほか、年齢を問わずリラックスできて寛げる場にもなり、また、ダイニングやキッチンに近い場所に設けると、家族が集うスペースの中心ともなります。

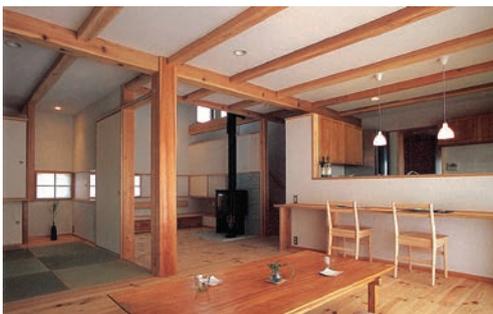
「板の間」は木の柔らかな触感や温かみを感じられ、椅子座だけでなく床座の生活にも利用できます。小さな子どもの遊びにも適しますので、子どもを中心にし

た家族の集いをうながします。

「土間」は趣味を楽しめる以外に、戸外に面する開放的で気持ちのよいしつらえにして、第二のダイニングや子どもの遊びに利用することも考えられます。

「囲炉裏」は採暖や調理に使われ、かつては家族がその周りを囲んで団らんする生活が行われていました。今日、囲炉裏が設けられることは少なくなりましたが、火のある場を住まいの中心とする考え方は大切にされ、薪ストーブ等の普及が進み、集いの場を演出しています。

このように空間構成にマッチした床の素材や暖房機器の採用等により、家族が集う場に相応しい空間づくりにつながるものと考えられます。



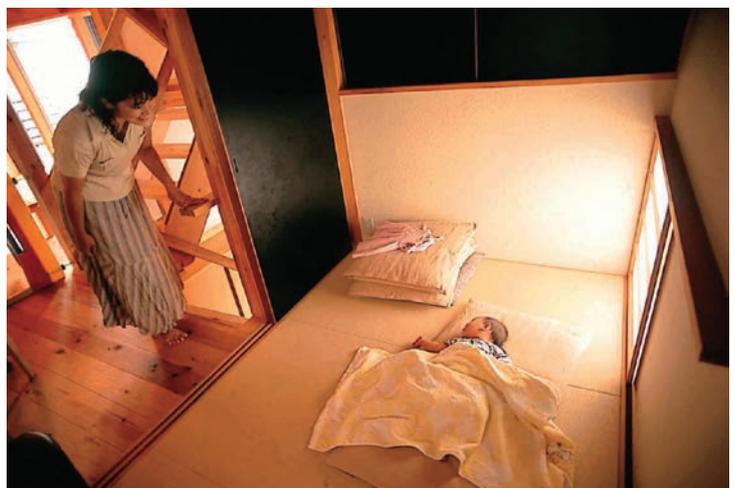
温かみのある無垢材の板の間と畳の間。子どもの遊び、お年寄りの寛ぎ等、様々な使える(写真:①)

玄関から続く土間スペース。家族が集まり、遊びや趣味を楽しむ(写真:①)



食卓に炉を設けている。家族が火を囲み食事を楽しむことを重視している(写真:①)

小上がりの畳の間をダイニング・キッチンの近くに配置。子どもを休ませたり、家族がくつろぎやすい(写真:①)



家族の気配や様子をを感じる

襖 引戸 障子

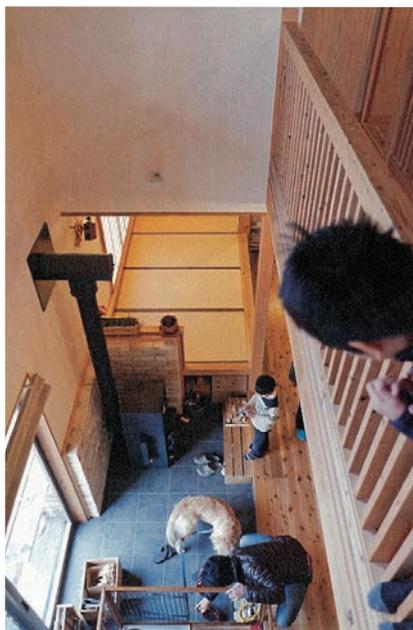
続き間 吹抜け 畳(和室)

かつての日本の住まいでは、内部に横引式の「襖」「引戸」「障子」等の建具が使われてきました。洋風化・個室化が進んで和室が減少したことに伴い、現代の住まいでは回転式のドアを用いることが一般的になっています。

横引式の建具は、回転式のドアに比べて開放時に通行の邪魔にならず、開放寸法を自由に調整できます。隣の部屋の様子を視覚的に遮りたいときには閉鎖したり開放寸法を小さくし、生活の様子を窺い知りたいときには開放寸法を大きくする等、使い分けができます。こうした家族同士が日常的にお互いのことを気に留める暮らしを重ねて、他者との関係を配慮する気持ちが育まれることにつながるかもしれません。

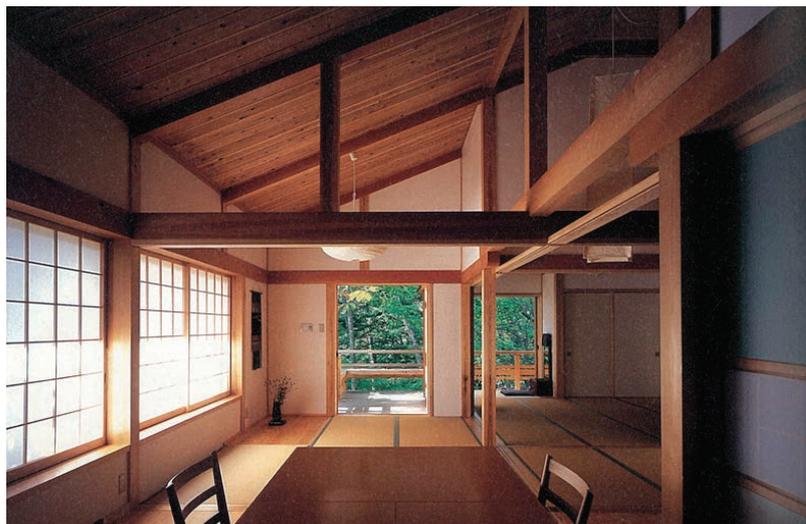
今日、引戸や障子のデザインは工夫されたものが見られ、洋室に使用してもとくに不釣り合いになることはありません。とくに障子を用い、木の棧と紙が織りなす意匠の美しさにより、室内の雰囲気をも柔かく洗練したものにする事例も多く見られます。

最近では、個室よりも家族の共用スペースを重視した、連続性・一体性の高い間取りも見られるようになってきました。家族が時間や空間を共有して、一緒に過ごすことを大切にするライフスタイルの現れと言えるでしょう。襖、引戸等の柔らかい間仕切りを上手く使い、そうしたライフスタイルに相応しい場をつくることもできるでしょう。



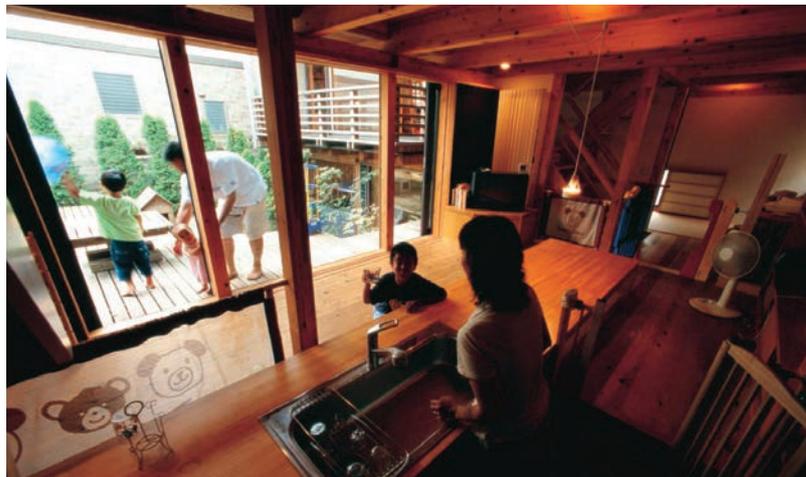
吹抜けを介して、1階と2階にいる家族が、お互いの様子をうかがい、声掛けする（写真：①）

キッチンから見渡したリビング。奥の土間と格子の引戸で仕切り、利用に応じて開閉（写真：①）



ダイニングと連続する畳の間、開放的なつくりで食事や寛ぎの様子が住宅全体に拡がる（写真：①）

キッチンで食事の支度をしながら、デッキや室内で遊ぶ子どもの様子が見られて安心（写真：①）



2.2 日々の暮らしを楽しむ

暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう

和の意匠を味わう

☞ 瓦屋根 漆喰壁 板壁 畳(和室)
真壁 格子 障子 襖 引戸
大黒柱 自然素材・地域産材

日本の住まいは、懐かしさ、落ち着き、愛着等を感じることで自然の材料が各所に用いられ、その素材を活かした意匠が施されていました。そうした素材や意匠は視覚的な豊かさを与えてくれるだけでなく、機能上も意味があり、継承されて使われてきました。

「瓦屋根」「漆喰壁」「板壁」は日本の住まいの代表的な外装材で、落ち着いた深みのある印象を与えると同時に、日本の多雨・高温な気候風土に対して建物を保護する機能をもっています。

室内は「和室」で、柱を表に見せ壁に漆喰塗り等を施す「真壁」を基本とし、建具や床材・天井材には木や竹、い草・わら等の「自然素材」が多く用いられ、柔らか

で優しい質感を感じられるとともに、調湿等の効果もあると考えられています。これらの素材は耐久性が高いことに加え、入手し易く補修も比較的容易です。

現代の住まいでは、伝統的な素材や意匠のみで構成するのではなく、新しい建材や工法を組み合わせることが考えられます。椅子座の生活や大壁のしつらえと、自然素材やきめ細かさに配慮された和の意匠を工夫して、バランスよく組み合わせることにより、現代のライフスタイルにもよく合い、材料や建材の生産・流通状況にも対応した、新しい洗練された意匠を創出することができるでしょう。



畳、雪見障子、襖、土壁(聚楽壁)。小さなスペースでも和の意匠が活かされ、居心地がよい(写真：①)

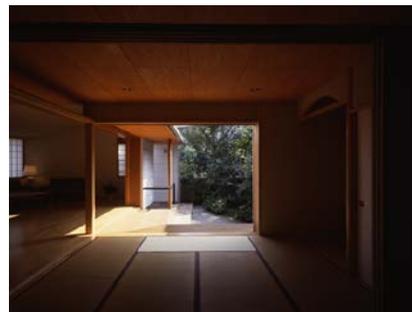


太い象徴的な柱を据えて畳の間を2方に開放。材のプロポーションに配慮され、板の間とも調和し、空間のメリハリを感じさせる(写真：①)

漆喰壁、瓦屋根の伝統的な住宅。落ち着きを感じさせる



和室と連続する庭。プロポーションの美しさと陰影による深みを感じさせる(写真：⑤)



かとうぐち(火灯口)と和紙を用いた壁装。温かさ、柔らかさを感じさせる(写真：①)



趣味を実践し楽しむ

近年の余暇時間の拡大、所得の増加、情報化等とともに、住まいの中でも趣味を実践するライフスタイルが重視されています。読書、絵画、茶道、生花、料理、音楽、健康増進、DIY、ペット、園芸等、住宅のなかで実践される趣味には様々なものがあります。

趣味を十分に行うには、各趣味に応じて、汚れにくさ、吸音性や遮音性、座れる床、戸外とのつながり等を備えたスペースが必要になります。けれども、例えば茶室のように、使い方が特定の趣味に限定される部屋を用意できるケースは少ないのが実情です。そのため先人の試みを活かして、「和室」「土間」といった普段は家族共用の場でありながら、必要時に別の目的に利用できる融通性・転用性の高いしつらえのスペースを確保することが現実的と言えるでしょう。これらのスペースと隣室や庭とのつながり・動線等に留意して、複数の用途に使いやすい場を創出する工夫が大切となるでしょう。



床面に堅牢な材料を用いた土間は、戸外の趣味生活にも対応しやすい(写真:①)

押入の上部スペースに神棚を設置。床の間とともに飾りの要素となっている(写真:①)

思い出を受け入れ、心を落ち着かせる

かつての日本の多くの住まいには、「仏壇」「神棚」といった礼拝の場が設けられていました。これらは単に信仰や宗教上の用具ということだけでなく、昔は訪問客がまず仏壇に挨拶する習慣があったように、普段の生活のなかで礼節を知り学ぶ場としての意味もありました。

現代の生活習慣は昔とは著しく変わりましたが、現代でも、礼節を重んじる機会、祖先のことを思い敬う機会等は、自己の心情を顧気持ちが落ち着くとともに家族のつながりを再確認できる面もあるでしょう。

洋風化し、広さの限られた住まいにおいて、「仏壇」「神棚」のスペースを確保し、現代の意匠や家具等と調和させるのは難しい面もあります。しかし、例えば、マンションでも飾り付けのコーナーと一体にする、建具等で仕切れるようにする、将来のスペースを用意しておく(当面収納に用いる)等の工夫により、そうした場を形成し、継承していく方法があると考えられます。



畳縁のない半畳を敷き込んだ和室。ニュートラルな雰囲気、様々な使い方に対応させやすい(写真:①)

リビングに連続する和室に仏壇を設置。床の間のとりに納められている(写真:①)



2.2 日々の暮らしを楽しむ

自然の変化やその風合いを感じとる 自然の素材を味わい、継承する

☞ 瓦屋根 土壁 漆喰壁 板壁
襖 引戸 障子 畳(和室)
板の間 自然素材・地域産材

かつての日本の住まいは、木、紙、土、石、竹等の自然の材料を基本としてつくられていました。それらの多くは地域で採取され、地場の職人により生産・加工され、経年時に修繕が施され、使い続けられてきました。

自然の材料は豊かな素材感や風合いを備えています。また、加工・製作にも工夫が施され、美しい造形が多くあります。それらが身近にあることは、人の感性の繊細さや感受性、愛着を育む効果があると言えるでしょう。

また、自然の材料は手入れに特殊な技術が必要としないものが多く、その方法は先代から伝えられて住み

手自らが手入れを担っていました。それゆえに、住み手が住まいに対し愛着を持ち大事にしてきたという面もあるでしょう。

現代の住まいにおいても、「瓦屋根」、「土壁」、「漆喰壁」、「板壁」「襖・引戸」「障子」等の木製建具、「畳」「板の間」といった自然の材料やそれを用いてつくられる建材を取り入れることは、特別なことではありません。とくに自然素材への関心は最近高まってきています。自然の材料を用いることは、コストに多少の配慮が必要になることがありますが、暮らしの豊かさだけでなく長寿命で愛着のある住宅づくりやそのための地場の技術の保全にも奏功すると言えるでしょう。



障子の組子と和紙のテクスチャー、プロポーションを味わう



瓦屋根、漆喰壁の素材の質感、対比を楽しむ



和紙を用いた壁装の柔らかみのある素材感を味わう(写真：①)



外壁下見板張りの質感を味わう。経年により愛着が育まれる(写真：①)



畳、襖、障子、漆喰塗り、木の柱・差し鴨居の自然の素材で構成した和室。清潔で洗練された印象(写真：①)

四季の変化を感じ、楽しむ

日本の四季の変化は、私たちの日常生活に潤いや豊かさをもたらしてくれます。かつての日本の住まいでは、戸外の植栽や木々等が季節とともに変わっていく様を、室内からも感じ、楽しむことが、大切にされてきました。

庭の各所には花木等「植栽」がきめ細かく施され、「前庭」には季節感を感じるシンボルツリー等が植えられ、訪れる人を迎えました。

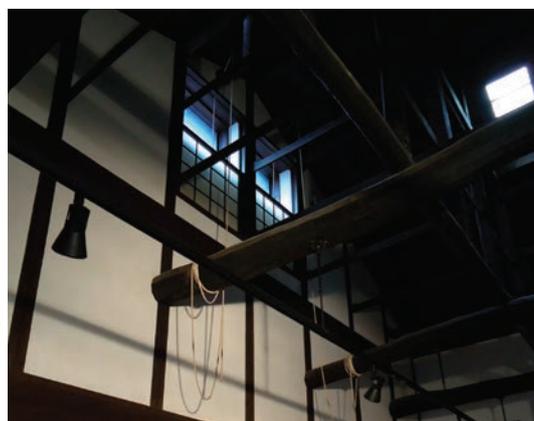
戸外と室内の間の境界には、庭の配置や植栽を考慮して「掃き出し窓」「地窓」等が適所に設けられ、戸外の自然の景観が、室内にいながら様々な場において望まれました。

また、敷地条件に応じ、「坪庭・中庭」を計画して室内と一体性の高い戸外空間をつくり、室内環境を少しでも心地よいものにする工夫が講じられてきました。



庭の緑への眺めを意図した大きな嵌め殺し開口（写真：⑤）

伝統的な民家の通りニワ上部に設けられた高窓。やわらかい光が採り入れられる



キッチン・ダイニングに面する大きな掃き出し開口を通して、庭の緑と季節感を日々感じられる（写真：①）

リビングの掃き出し窓に紙障子を設けて、日射をやわらかい光に調整する（写真：①）



光を採り入れる、制御する

かつての住まいには、腰壁のある窓以外に、掃き出し窓、欄間窓、高窓等様々な種類の窓が設けられていました。いずれも採光に効果がありますが、とくに町屋等に設けられていた「高窓」は、室の奥まで光を導き、光の均一性を高める効果があります。

地面で反射した光を軒裏でさらに反射させて光を導くこと、白漆喰等の反射率の高い室内仕上げとすることも、室の奥まで光を導き入れ、明るさを高める効果があります。

これらは室内の明るさの確保に寄与しますが、単に明るさを確保するだけでなく、陰影が生活に情趣をもたらすこともあります。「障子」「すだれ」等を窓に組み合わせることで、採り入れる光の量や質を調整し、少し暗くしたり柔らかい光にすることもできます。また、プライバシーの確保にも役立てることが出来ます。

2.3 心地よく環境にやさしい生活を支える

夏の快適、涼やかな生活に寄与する

自然の風を取込み涼感を得る

☞ 掃出し窓 高窓・天窗 地窓
越屋根 格子 続き間 吹抜け
襖 引戸 欄間 坪庭・中庭

蒸し暑いモンスーン気候のわが国では、「夏を旨にすべし」と言われてきたように、住まいに自然の風を取り入れて涼感を得ることが、古来より重視されてきました。

風を取り入れるためには、風の流入口と流出口となる開口部を壁に設けることが必要です。夏や春・秋における敷地の風特性を読み取り、卓越風が当たる壁面に「掃き出し窓」等の大きな開口部や、全開放できる開口部を設けることが効果的です。室内に滞留する空気は温められて上昇しますので、開放できる「高窓」を設けてそこから排出するとともに、室内の低い位置に「地窓」を設けて外部空気を取り入れ、室内空気の循環を

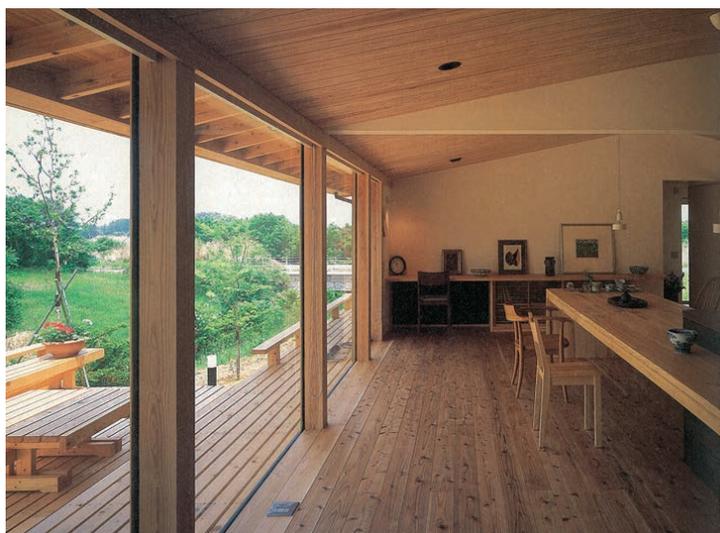
促進することも有効です。開口部の防犯性やプライバシーを高めるためには、大きさを工夫したり、「格子」等を付属させることで対応できます。

室内の通風性や空気循環性を高めるために、平面的には「続き間」を、断面的には「吹抜け」を設けて、連続性・一体性の高い間取りにするとともに、部屋と部屋の間を「引戸」や「欄間」で、開放しやすくしておくことも大切と言えます。

狭小な敷地の場合、「坪庭」や「中庭」を設け、日中日陰となる庭を通じて、温度の上がらない外気を室内に取り入れて、涼感を得る方法もあります。

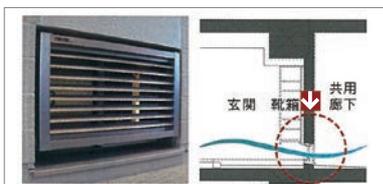


リビングに面する引込み形式の全開放できる掃き出し窓。対面にも窓を設けて室内の風通しをよくする（写真：①）



吹抜けと1階、2階に大きな窓を設置。外部風を取り込み、住宅内での空気の動きをうながす

集合住宅の住戸の玄関収納下の地窓。プライバシー、防犯性に配慮して通風を確保（写真：③）



玄関靴箱下換気用地窓

玄関靴箱の下部に換気用地窓を設け、玄関扉を開けなくても、風の通り道を確認。共用廊下側に面格子を設置し、防犯性にも配慮しています。

地窓と一般窓を組合せ、地窓には格子を設置。通風、プライバシーの確保とともに防犯や転落防止にも配慮（写真：⑦）



日射を遮り室内への流入を抑える

☞ 深い軒 日除け(すだれ・よしず)
窓庇 障子 植栽

夏や春・秋の暑い日に、住宅内への太陽熱の過度な流入を抑制し、冷房に頼らないでも心地よい室内環境を保つために、とくに日射遮蔽は重要となります。

日本の住まいに古くから用いられた「深い軒」は、太陽高度が高くなる南からの日射を遮るのにとくに効果があります。また、太陽高度の低い西・東からの日射を遮るためには、窓の外側に遮蔽物を設けることが有効です。最近では室内にカーテンやブラインド等がよく設けられますが、窓の外側に設置する方が日射を遮る効果は高く、古くからの「すだれ・よしず」はとて有効です。安価で取り扱いも簡便なので、窓庇や軒裏等に取付け用のフックを設けるとよいでしょう。

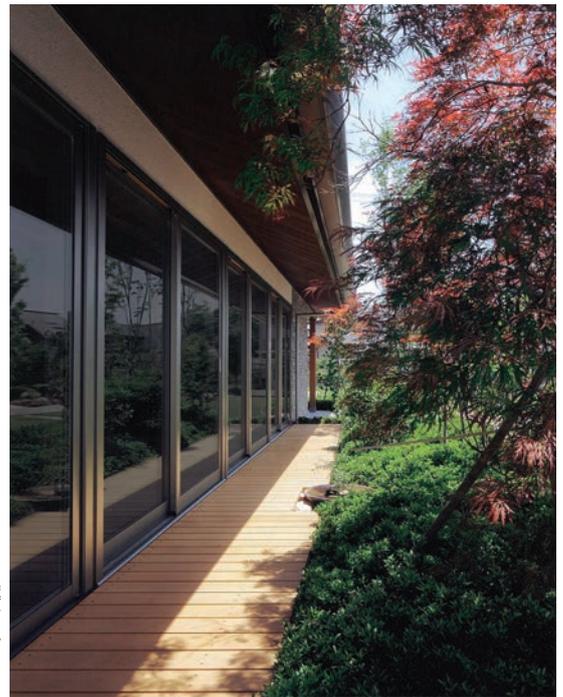
これらは日射を取り入れたい冬等には、取り外しできます。最近の外付けのブラインド等も、「すだれ」同様、遮蔽効果の高い建材です。

建物周囲の「植栽」に気を配ることも大切です。落葉樹を窓の位置と方位を意識して植樹する、照り返しを抑制するために建物に近い地表面を芝や土で覆うこと等も、日射を遮る工夫の一例です。

また、屋根や外壁は、日射により温度が上がると室内側への放熱が生じるので、それを抑制するために、瓦や板壁を用いた場合でも下地に断熱層、通気層を設ける対策を講じることが望まれます。



室内にすだれを吊るし、日射の流入を抑制。見た目にも涼感と風情が感じられる (写真:①)



軒庇による日射遮蔽。太陽高度の高い南面では単独で使える手法 (写真:②)

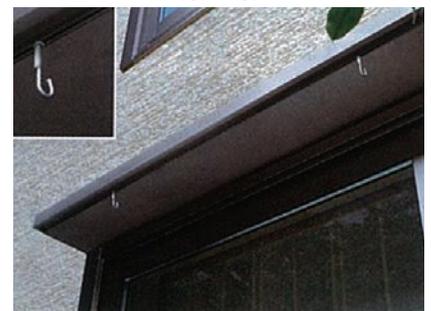
紙障子で日射を遮るとともに視線を制御する



軒先から吊るした紐につる性植物を這わせた緑のカーテン (写真:⑦)



窓庇の先にフック状の金物を取り付け、すだれ等を設けられるようにする (写真:⑧)



日射熱を集め蓄えて暖かくする

☞ 掃き出し窓 土間 土壁
自然素材・地域産材

冬に太陽からの日射量が多い地域では、日中の太陽熱を室内に取り入れて暖房の効果を得ることができません。暖房効果は、太陽熱を室内に多く取り入れて(集熱)、熱を蓄えて夜間等に持ち越す(蓄熱)ことで得られますが、屋根・壁・床や開口部等の断熱性を高めて熱が室内から外に逃げないようにすることが必要です。

かつての日本の住まいから、このうち集熱と蓄熱に効果のある手法を見出すことができます。

「掃き出し窓」等の大きな開口を設ける住宅のつくりは、集熱に適しています。「掃き出し窓」を南面に連続

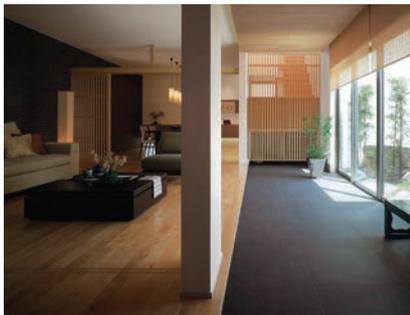
して設けることにより、集熱の効果が上がります。窓の上にある程度深い軒があっても、冬期は太陽高度が低いので、集熱が損なわれることは少ないと言えます。

蓄熱の効果を得るためには、土・石・陶器質タイル・瓦・漆喰等、熱容量が大きな材料を室内に用いることが必要です。「土壁」を外周壁や間仕切り壁に用い、漆喰塗り仕上げ等とすることも蓄熱効果を高めるために有効です。また、「土間」は熱容量が大きな材料を用いやすい床です。南玄関の土間床を大きく取りリビングにつながるプラン等も考えられます。



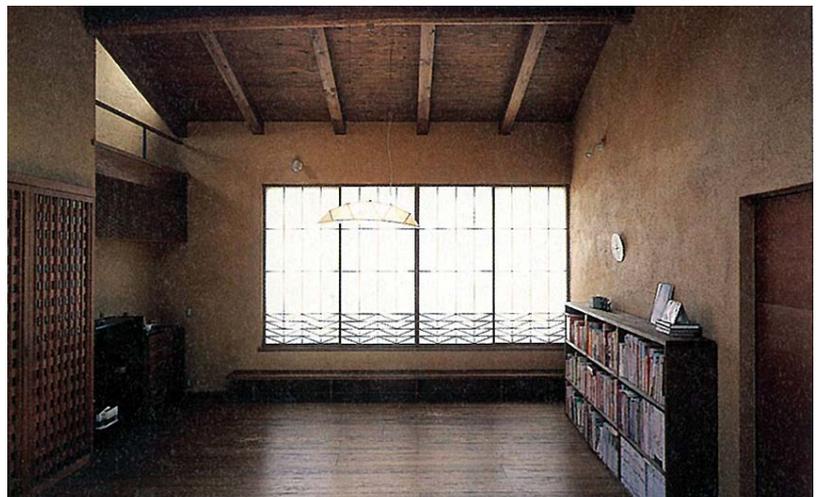
南面の掃き出し窓と窓際の土間。土間床のコンクリート等は蓄熱性が高い

南面の連続する掃き出し窓と窓際の土間。大きな開口は太陽熱を取得する効果が高い(写真：②)



南面の連続する掃き出し窓と石張りの床。石やタイル等は蓄熱性が高い(写真：②)

土壁や漆喰塗り仕上げの壁装。風合いがよいことに加え、土壁は蓄熱にも効果がある(写真：①)



2.4 外的環境から建物を保護する

家をいためる自然の力を和らげる 風雨から建物を守る

年間降水量が世界平均の2倍で、台風の襲来が多いわが国では、強風や強雨、多雨から建物を守る工夫が古くから講じられてきました。

雨の影響を最も受ける屋根は、「勾配屋根」とし、「深い軒」を出すことが重要です。勾配屋根は、雨水を速やかに建物の外に排水するための合理的な形態です。軒は、雨を外壁面に当たりにくくして建物を雨から守ります。

屋根を葺く「瓦」は、紫外線等にも強い耐久性の高い材料であることに加え、瓦の裏面に空気層があるこ

とで、雨水や湿気が入った場合でも、その排水や乾燥をうながします。

外壁には、雨掛かりの影響を小さくするために、土壁の外側に「板壁」を設ける、防水性の高い「漆喰壁」とする等、土壁を保護する工夫が一般的に行われました。雨の多い高知等で見られる外壁の水切り瓦は、壁を伝う雨水をこまめに切ることで、外壁に影響する雨水の量を軽減する工夫です。

開口部からの雨水浸入を防止する対策も重要で「窓庇」や「雨戸」を設けることも効果があります。(次頁へ)



妻壁の窓に付属する窓庇。開口部を雨から守るとともに、日射遮蔽の機能ももつ (写真：①)



富山・砺波平野の防風機能を備えた屋敷林



通風機能を備えた雨戸。ルーバーは可動し、通風・採光・視線を制御する (写真：②)



耐久性の高い瓦の勾配屋根。降雨を建物の外に速やかに排水する

土壁を保護する下見板を付加した外壁。雨掛かりの影響を軽減する



☞ 勾配屋根 瓦屋根 深い軒
板壁 漆喰壁 窓庇 雨戸
植栽 建物配置

台風の常襲地や季節風の強い地域等では、建物周囲に樹木を配する等、「植栽」により風や雨の影響を緩和する工夫もみられます。東北の「イグネ」、富山県砺波地方の「カイニヨ」等の屋敷林等の例があります。

これらに掲げる知恵や工夫に共通するのは、自然の大きな力に対して謙虚に向き合い、逆らわず、無理をせず、力を和らげる考え方です。建築技術や材料が発達した現代でも十分に有効な方法であり、積極的に取り入れることが望まれます。

湿気から建物を守る

高温多湿なわが国では、主体構造の土台・柱・梁等の木材を腐らせないようにすることが、重視されてきました。

「真壁」は構造の柱や梁を表に見せて、その内法を壁仕上げとする構法です。構造材が常に空気に触れているので乾燥しやすく、耐久性に優れ、改修もしやすい工法です。換気性能の高い床下や小屋のつくりは、床組や小屋組の木材の乾燥に効果があります。また、「高窓」は室内で暖められた空気の排出に有効です。「畳」(伝統的な製法による稲わら畳床) に用いられるい草・稲わらや内壁仕上げの左官材料の多くは吸放湿性が高く、室内の湿気や水分を吸収・放出するので、結露防止等の効果が得られます。



越屋根に設けた開口を開放して、暖められた室内空気を排出する (写真:①)



敷地周囲の生垣により強風から建物を守る (鹿児島)



外壁を流れる水を切る水切り瓦 (高知)



小屋裏現しで天井を高く開放的にし、室内の空気循環をうながす (写真:⑥)



畳、漆喰塗等の自然素材を利用し、吸放湿性を高める (写真:①)

3章 日本の住まいの要素

日本の住まいの要素を36種類取り上げ、それぞれについて、採用のメリットや採用する上での留意点等を、事例を交えて解説します。

日本の住まいの要素

現代における4つの「住まいづくりの目的」を達成するためには、建物の形式、材料・構法、空間構成等の要素（ハード面）と、住まいを維持・管理し活用する方法（ソフト面）の両方を上手く用いなければならないでしょう。

手引きでは、このうちハード面の「日本の住まいの要素」を36種類取り上げ、その概要と事例を紹介します。事例は、住まいづくりに参考になりそうな手法・技法を、

伝統的な住まいと現代の住まいから広く取り上げます。

下の図は「日本の住まいの要素」と「住まいづくりの目的」の関係を表しています。住まいづくりで重視しようとする目的を実現するためには、関係が深い要素を採用することが有効になるでしょう。

ご意向や条件に応じて採用できそうな要素を探すヒントにしてください。

		住まいづくりの目的							
		人と人の関係を守り育てる		日々の暮らしを享受する		心地よく環境にやさしい生活を支える		外的環境から建物を保護する	
		人を迎え入れ集う	家族が見守り合い、成長する	暮らしのなかで楽しみや豊かさを味わう	自然の変化やその風合いを感じとる	夏の快適、涼やかな生活に寄与する	冬の快適、あたたかな生活に寄与する	家をいためる自然の力を和らげる	
日本の住まいの要素	屋根・軒	勾配屋根							
		瓦屋根							
		越屋根							
	外壁	深い軒							
		板壁							
	開口部	漆喰壁							
		高窓・天窓							
		地窓							
		掃き出し窓							
		窓庇							
		日除けすだれ・よしず							
		格子							
	内部建具	雨戸							
		襖							
		引戸							
		障子							
	内部空間	欄間							
		続き間							
		縁側							
		玄関							
	ゆか	吹抜け							
		畳 和室							
		板の間							
	内部意匠	土間							
		真壁							
	装い	大黒柱							
		床の間							
		仏壇・神棚							
	素材	囲炉裏							
		土壁							
	戸外	自然素材・地域産材							
		濡れ縁							
		坪庭・中庭							
	配置	植栽							
		前庭							
			建物配置						

目的と要素の関係 強い 弱い

表／「日本の住まいの要素」と「住まいづくりの目的」の関係

3.1 屋根・軒

勾配屋根

こうばいやね

雨の多い日本では、屋根に降った雨水を速やかに排水できるように、勾配のある屋根が発達してきました。

メリット：①雨水を速やかに排水することができるため、屋根の防水性能が向上。②多雪地域では金属葺きとすることで屋根雪を自然に落とすことが可能。③伝統的な町家のように屋根の向きを揃えることで美しいまちなみを形成。④小屋裏を内部化して、勾配天井やロフト等拡がりのある多様な室内空間が実現。

留意点：斜線制限のある地域では、北側隣地への圧迫感を軽減するような屋根の掛け方が必要です。



●（雨水の排出）急勾配の屋根は雨水を早期に排出し、屋根の防水性を向上（大分）



●（まちなみの創出）屋根の向きが調和した美しい町家のまちなみ



●（楽雪屋根）雪割棟を設け、金属葺きとして屋根雪を自然に落とす。山並みに調和（富山・楽雪住宅）



●（集落景観の形成）特徴的な集落景観を形成する勾配屋根の美しい民家（富山・アズマダチ）

瓦屋根

かわらやね

日本の瓦の歴史は古く飛鳥時代までさかのぼります。瓦は日本の気候風土に適し、耐久性と美観を兼ね備えた屋根材料と言えます。

メリット：①耐久性が高く沿岸部の塩害にも強い。②劣化・破損しても部分的な交換が容易。③裏面の空気層による断熱効果や下地の乾燥効果。④いぶし瓦等は経年とともに趣きを増す。⑤自然素材のため廃棄後も土に還る。

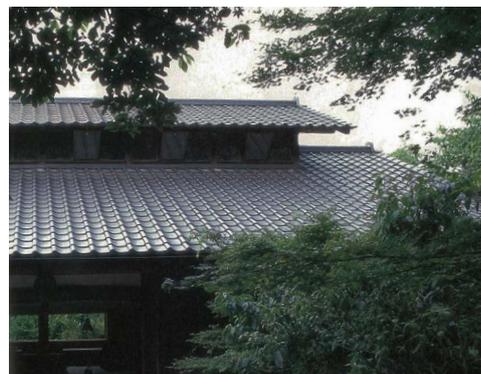
留意点：重量が大きいため、金属屋根等と比べて壁量を増やす必要があります。地震や風等の外力に配慮した留付け方法を採用しましょう。



●（上屋と下屋）瓦の美しい屋根並み（富山・八尾）



●（地域産材の瓦）赤瓦による地域固有の景観（島根・石見）



●（いぶし瓦）経年変化により美しさを増すいぶし瓦（写真：①）



● (越屋根の現代住宅) 採光・通風・換気を目的とした越屋根 (写真: ①)



● (越屋根の現代住宅) 美しい景観を創出する越屋根 (写真: ①)



● (越屋根の現代住宅) 越屋根の頂側窓からそそぐやさしい光 (写真: ①)



● (深い軒とけらば) 軒・けらばを共に外壁から大きく張り出し、外壁を保護し半外部をつくる (写真: ⑥)



● (軒下の利用) 軒下の多様な使われ方 (ウッドデッキ、薪の乾燥等) (写真: ⑥)



● (まちなみ創出) 深い軒による陰影のある美しい外観(熊本・水俣エコハウス) (写真: ⑦)



● (せがいつくり) 軒を深く出すための伝統的な工法「せがいつくり」(新潟・山古志)

越屋根

こしやね

越屋根とは、元々は囲炉裏やかまどの煙出し等のため、屋根の上に一段高く設けた小屋根を言います。この例のように、現代の住宅にも上手く取り入れられています。

メリット: ①越屋根に設けた頂側窓(ちょうそくまど)から採光や通風・換気を得ることができるため、奥行の深い住宅に設けると効果的。②天窓と比べて均質の明るさや安定した通風が得られ、かつ防水性に優れる。③屋根形状にアクセントを与え、美しい景観を創出。

留意点: 本屋根と越屋根の取り合い部の雨仕舞に十分注意しましょう。

深い軒

ふかいのき

降雨から外壁を保護し、夏の日射を遮蔽できるように、屋根の軒を深く出す建築様式が発達してきました。

メリット: ①雨・雪から外壁・開口部を守り建物の耐久性を向上。②夏の日射遮蔽による冷房負荷の軽減。③軒裏の反射光を室内に導き入れることが可能。④建物外周に半屋外の間接領域(縁側や軒下空間)を創出。⑤陰影のある美しい外観やまちなみの創出。

留意点: 敷地にゆとりがなく隣家が近い場合は、雨掛りの大きい面(道路側等)だけでも十分な軒の出を確保しましょう。

3.2 外壁

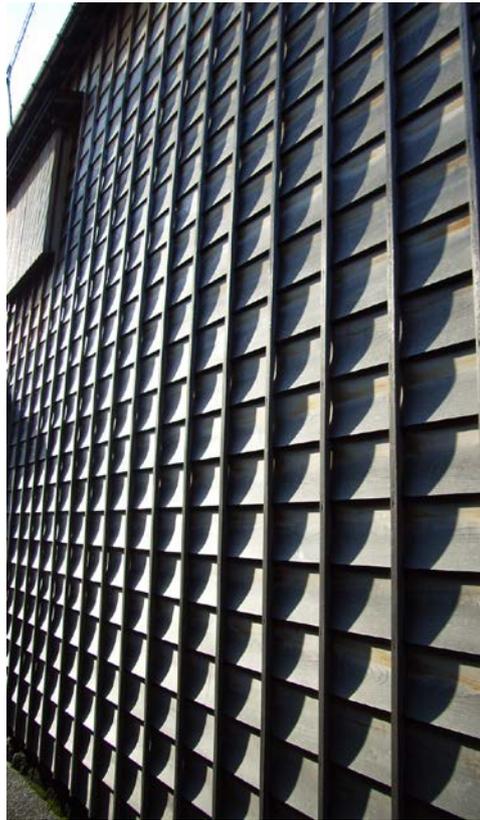
板壁

いたかべ

板張りの壁（板壁）は、元々は外壁の塗り仕上げ面を風雨等から保護する目的で用いられてきた外壁仕上げで、下見板張り、縦羽目張り等の工法があります。

メリット：①自然素材による落ち着いた風合いの外観。②腐朽や汚損が進んでも部分交換や補修が容易（工業製品と違い材料の調達が容易）。③地域の木材や大工技術の活用による森林の保全育成・地域経済の活性化。

留意点：外壁に防火構造が求められる地域では、防火構造とした上で板張りとする等の工夫が必要です。塗装を行う場合は、木目を消さない含浸性の塗料がお勧めです。



●（下見板張り）下見板張りにより土壁を保護した例



●（腰板張り）外壁の上部は漆喰壁とし、雨掛りの多い腰壁を板張りとする例（写真：①）



●（板壁の補修）塗装を施すことにより部分的に張り替えた板壁の箇所がほとんど目立たない例

漆喰壁

しっくいかべ

漆喰は、土壁の上塗り等に用いられる水酸化カルシウム（消石灰）を主成分とした建材です。外壁だけでなく、内壁にも使えます。

メリット：①防水性があり不燃素材であることから外壁仕上げに用いると防水性能・防火性能が向上。②吸放湿性や空気中の化学物質を吸着・分解する働きがあり室内空気環境を向上。③自然素材と職人の手仕事による風合いの良さ。洋間にも漆喰は調和する。

留意点：漆喰は汚れにくい材料ですが、ビニールクロスのように水拭きはできません。メンテナンスの方法は専門の方に聞きましょう。



●（伝統的な民家）伝統的な民家の漆喰壁



●（現代的な住宅の漆喰の外観）下見板張りとのコントラストによる美しい漆喰壁



●（漆喰の内観・和室）左官職人の手仕事による風合いのある内部の漆喰壁（写真：⑥）



●（漆喰の内観・洋間）洋間にも調和する漆喰（写真：⑥）

3.3 開口部



●（現代の住まい）吹抜け部分の上部が開口となっている例。高窓の効果を期待できる



●（伝統的な民家）町家の土間の採光と換気を確保する高窓と天窓



●（現代的な住まい）通常の天井高さで内法の上部分が開口となっている高窓の例（写真：④）

高窓・天窓

たかまど ・ てんまど

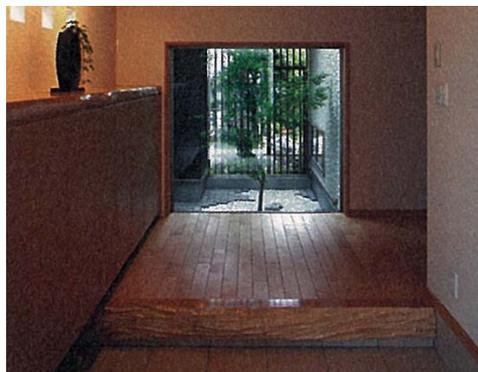
高窓は、外壁の上部に設ける窓を言い、天窓は天井面に設ける窓を言います。採光や排熱・通風に効果があります。

メリット：①高い位置に設けられる開口のため、採り入れた光が部屋の奥まで届き、均一性の高い明るさを確保。②室内の上昇する暖かい空気を流出し易く、夏の排熱・排湿に効果的。③自然換気・通風を促進。

留意点：高窓は、日除けや開閉方式、清掃等のためのサービスバルコニー、デッキや梯子をかける場所の検討が必要です。天窓は特に雨仕舞への配慮、点検ルートの確保等が必要です。



●（伝統的な民家）町家中庭に面した開口



●（現代的な住まい）玄関ホールの正面できれいに庭の植栽をみせる地窓（写真：①）

地窓

じまど

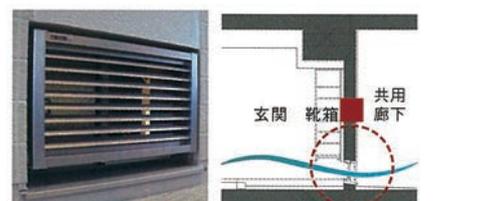
地窓は、床面に接して設ける外壁の窓のうち、高さが低いものを言います。採光や換気、戸外鑑賞の機能をもちます。

メリット：①床面の明るさを向上。②アイレベルにある隠したいものを隠しながら、足元にしつらえた見せたいものだけを見せる。③開閉させることで、床に近い高さの空気を動かして換気・通風する。

留意点：接地階の地窓は地面に近いため、雨がかったり泥が跳ねたりしないように配慮が必要です。庭等を見ることが主な目的の窓はガラスのみできれいにつくりませんが、換気・通風に使う場合は開閉方式や防犯に配慮した格子等の設置を検討します。



●（現代的な住まい）収納下の換気に配慮した地窓



玄関靴箱下換気用地窓

玄関靴箱の下部に換気用地窓を設け、玄関扉を開けなくても、風の通り道を確保。共用廊下側に面格子を設置し、防犯性にも配慮しています。

●（集合住宅の事例）住戸の通風に配慮した玄関収納下の地窓（写真・図：③）

掃き出し窓

はきだしまど

掃き出し窓は、床面の位置から内法（鴨居）レベルまで開いている窓を言います。各室が外部から出入りでき、引違いのほか、引込み戸による全開口や一部を嵌め殺し窓とする等、多様な開口形式があります。

メリット：①内外の一体性が向上し、人の出入りが可。②室内への十分な採光・通風の確保。③床面の明るさ向上。④冬期の集熱に有効。

留意点：屋外の空間構成や用途に配慮した設えとします。縁側、濡れ縁（デッキ）やバルコニー等と上手く組み合わせます。



●（伝統的な民家） 屋外と室内の一体性を高める掃き出し窓



●（現代の住まい） 引違いでリビングと庭が連続する例（写真：①）



●（現代の住まい） 引込み戸で全開口となり、リビングと外部デッキが連続する例（写真：①）



●（集合住宅の事例） フルフラットでリビングとバルコニーが連続する例

窓庇

まどびさし

窓の上に取り付ける庇を言います。直上に屋根がない場合、軒やけらばの出が小さかったり距離がある場合に、雨水対策や日射遮蔽に有効です。

メリット：①窓が雨がかりにならない、水切りの役割となることにより、開口部を雨水から保護し、建物の耐久性向上に貢献。②日除け、日射遮蔽の役割（とくに南面）。

留意点：庇を支持する構造材の固定、庇の両端部、庇と開口部の取り合い等には、防水、外壁仕上げの納まりに特に配慮が必要です。日射遮蔽に用いる場合、庇の寸法は方位、太陽高度等に配慮します。



●（現代の住まい） 妻壁の開口部に設けられた窓庇（写真：①）



●（ハウスメーカーの事例） 上部に軒庇のない掃き出し窓に取り付けた庇（写真：②）



●（現代の住まい） 妻壁の開口部に設けられた窓庇（写真：①）



● (伝統的な事例) 軒の中間に簾が連続してかけられている



● (現代の住まい) 軒先に吊るされた簾。軒先から少し内側に設けた方が耐久性は向上する (写真: ②)



● (現代の住まい) 開口のすぐ外部に吊るされた例。開口から離れたほうが遮熱の効率は良い



● (ハウスメーカーの事例) 窓底の先端に簾を吊るするためのフックが取り付けられている (写真: ②)



● (伝統的な事例) 京町家で通りからの視線制御を主に意識している



● (格子戸) 締め切ると、風を通しつつ中からは見え、外からは見えない。まぶしさも緩和 (写真: ①)



● (多様な格子) 道路に近い場所等視線制御を主に目的として利用できる (写真: ①)



● (ハウスメーカーの事例) 金属製の格子でやわらかいしつらえを演出している

日除け

ひよけ

すだれ・よしず

すだれ(簾)とは、よし(葦)や細い竹を、糸や細い縄で編み連ねたもので、窓の外や軒先に垂らして日射を遮蔽できます。

メリット: ①窓の外側に必要時に設けて日射を遮る。外部に吊るすことが可能なため、カーテンや内部ブラインドより効果的に日射を遮断。②内部が外部より暗い場合(日中)、外のまぶしさを緩和。③外部からの視線を遮りながら通風を確保。

留意点: 予め吊るすための金物を庇・軒先等に設ける必要があります。架掛いが可能で、強風時や冬期等には取り外します。その際の収納場所を確保します。

格子

こうし

細い角材を縦若しくは横、縦横に隙間を開けて組み、建物本体や建具に取り付けます。視線・通風・明るさ等を制御します。

メリット: ①外部(斜め方向)からの視線を遮る。②日中、内部が外部より暗い場合、外のまぶしさを緩和。③通風を確保しながら、防犯の機能も有する。④角材の断面、ピッチにより効果的に日射を遮蔽。⑤細やかで美しい意匠。

留意点: 外部に木製格子を用いる場合、防火規定に関する運用方法の確認が必要な地域があります。また、耐久性への配慮のため、木製の縦格子では木口、横格子では部材上部に水をためない断面形状とする等の配慮が必要です。

雨戸

あまど

開口部を風雨から守るために、開口の外側に設けられた板引戸を言います。最近ではシャッターや可動ルーバーが組み込まれた製品もあります。

メリット：①開口部を風雨から保護。②台風時の飛来物から窓ガラスを保護。③防犯の機能。④遮音・遮光。⑤可変ルーバータイプは夜間の防犯と通風の両立や細かな遮光が可能。⑥ガラス戸、障子と組合せて開口部の断熱性向上。

留意点：木製の雨戸は下枠に水が溜まらないようメンテナンス等に配慮します。シャッターでは、開閉を容易にするために、電動もあります。



● (伝統的な民家) 板戸の雨戸



● (現代の住まい) 可変ルーバータイプの雨戸の例 (写真：⑨)



● (現代の住まい) シャッター形式の雨戸の例 (写真：⑩)

3.4 内部建具



● (伝統的な民家) 間仕切り板戸の引戸の事例 (写真: ①)



● (現代の住まい) 通風に配慮した格子を組み込んだ引戸の事例 (写真: ①)



● (現代の住まい) 夏期のしつらえとしての簀戸 (簾を仕込んだ建具) の例 (写真: ①)



● (現代の住まい) 上部に無双 (2枚の板を左右に移動させて開閉する戸) を組み込んだ建具 (写真: ①)



● (現代の住まい) 引込み形式の襖の例 (写真: ①)



● (現代の住まい) 現代の住まいの畳コーナーに取り入れられる襖の例 (写真: ⑩)

引戸

ひきど

水平方向にスライドさせて開閉する建具を総称して引戸と言います。開閉のしかた (片引き、引違い等)、建具の仕様 (面材、格子等) 等多様なバリエーションがあります。

メリット: ①開き具合を任意に調節可能。少し開けて通風や隣室の雰囲気を感じることができる。②開いた状態で建具が邪魔にならない。③高齢者等にとっても開閉が容易。

留意点: 大きな引戸は重くなりますので、吊戸とする等作動させやすくする工夫が必要です。また、丈の高い木製の建具は季節により反りが生じやすいので配慮が必要です。

襖

ふすま

木の骨組に紙を下地貼りし、表面を紙または布とした建具を言います。襖紙、下地、縁、引手に様々な種類があります。

メリット: ①簡易に扱える室と室のあいだの間仕切り。開け放しや取り外しがし易い。②様々な収納扉に利用できる (押入、天袋、地袋、仏間開き戸等)。③多様な図柄、素材、色調により装飾品となる。④茶道、華道、着付け等の活動に相応しい場の設えに寄与。

留意点: 木製の組子を骨組とした和襖以外に、ダンボールや発泡スチロールを下地とした廉価な製品も出ています。耐久性や風合い、機能に応じた種類を選択してください。

障子

しょうじ

木枠（組子）に紙を張った建具を言います。木枠の組み方やプロポーションによって、和風から洋風まで様々な趣を感じさせることができます。雪見障子や建具の一部が開閉するタイプもあります。また、引戸だけでなく、折れ戸としたものもあります。

メリット：①直射光を遮り、やわらかい光環境を形成。②開口部の断熱性を多少高める。③視線を制御しながら音、気配を伝える。

留意点：和紙を用いると破れるため、補修、張り替えが必要です。また和紙は時間が経つにつれ変色します。破れにくい素材は張り替えが難しい場合があります。



●（伝統的な民家）和室に障子を用いた例



●（現代の住まい）細やかに視線を制御する雪見障子（猫間障子）の例



●（現代の住まい）洋風のインテリアに障子をマッチさせた例（写真：①）



●（新しい取組）障子を用いた折戸の例（写真：②）

欄間

らんま

建具上枠（鴨居）と天井の間に設ける建具や飾りを言います。元来は襖、障子上部のものごとでしたが、最近では洋間の開き戸の上部に設ける例も見られます。

メリット：①欄間を透明としたり部分的に開放した意匠とすることで、部屋の間の連続性を確保。②暗い部屋への導光が可能。③開閉可能とすることで、通風・換気を確保。

留意点：欄間をガラス等透明とする際には、遮光に対する配慮も必要です。通風ができる欄間には、開閉する仕組み等を組み込み、冬期等に部屋の暖かい空気が逃げないようにする配慮が必要です。



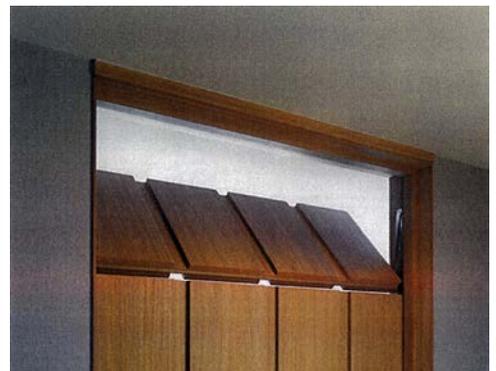
●（伝統的な民家）襖上部の伝統的な欄間の例（写真：①）



●（現代の住まい）開き戸の上部にガラス等の欄間を仕込んだ例（写真：⑧）



●（現代の住まい）通風を確保するため開閉可能な仕組みを持つ欄間の例（写真：①）



●（ハウスメーカー）天井までの開き戸の上部のみ欄間風に開閉できるようにした例（写真：④）

3.5 内部空間



● (畳の間の続き間) 和室二間を襖で仕切った本来的な続き間 (写真: ⑥)



● (畳の間と板の間の組合せ) 板の間のうち畳の間に面する部分を畳敷きとし、連続性を高める (写真: ①)



● (畳の間と板の間の続き間) 板の間と畳の間を連続させた続き間。和風とモダンの連続 (写真: ⑥)



● (畳の間と板の間の続き間) 床レベルを揃え襖を引き込むと連続した大きな空間となる (写真: ①)



● (伝統的な民家) 部屋から庭につながるあいだの落ち着いた落ち着きのある縁側 (写真: ②)



● (ハウスメーカー) 最近の住宅における和室前面の縁側 (写真: ②)



● (現代の住まい) 床の仕上げで縁側の空間を創出。空間に変化を与え、畳が日に焼けるのも防ぐ (写真: ⑧)



● (ハウスメーカー) 洋間の屋外側に連続する縁側。子どもの勉強スペースに活用されている (写真: ④)

続き間

つづきま

続き間は、本来、襖で仕切られた和室二間で、襖を外せば広間として使えます。現代の和室と洋室をつなぐものも、ここでは含めて扱います。

メリット: ①ひとつつながりの大きな空間は、日常の家族の居場所の広がりや来訪者が来たときの多人数の集まり等、多目的に利用可。②必要に応じて2室を別の用途に利用可 (来客のもてなしと寝室等)。③開放性、連続性の高い空間構成は、通風上も有利。

留意点: 使い方に応じて閉じ方と開き方、床段差をつくるつくりたくない、仕上げを揃える揃えないといった要素を決めることが重要です。

縁側

えんがわ

縁側とは戸外と主室に設けられた板敷の廊下状の空間で、主室に至る動線や主室の補助スペースとして利用されます。濡れ縁と違い、縁側は屋内空間です。

メリット: ①来客を玄関から座敷に迎え入れる正式な動線となるだけでなく座敷の格調を高める。②座敷等との間の障子を開放することによる一体的な利用や空間の広がりを確保。③夏の日射や冬の冷気から居住空間を守る緩衝空間 (寒冷地では冬のサンルームとして使われることもある)。

留意点: 床面積にゆとりがあることが必要です。縁側を設けられない場合、濡れ縁を設けることも有効です。

玄関

げんかん

住まいの主要な入口を言います。現代の住宅では、小さな土間と下駄箱といった最小限のものが一般的ですが、土間を大きくして収納やちょっとした接客スペースを設ける等の工夫も増えています。

メリット：①玄関の土間を大きく確保することで、ベビーカーや自転車等の収納に必要なスペースを確保できる。②下足で入れる収納室を確保し、屋外で利用する道具（雪かき、庭用等）の収納の利便性を確保。

留意点：玄関を引戸とすることでスペース効率が向上します。玄関に開口を設けると採光確保に有効ですが、防犯への配慮が必要です。



●（畳敷きの玄関） 座って来訪者を迎えることができるしつらえ（写真：⑧）



●（おしゃべりスペースのある玄関） ちょっと坐れるおしゃべりスペースを確保した玄関（写真：④）



●（収納のある玄関） 玄関土間を大きく確保して、収納スペースを確保した例（写真：①）



●（和を取り込んだ集合住宅の玄関） 様々に使える大きさ、風や光の取り込み、和の素材の活用（写真：①）

吹抜け

ふきぬけ

上下の2つの階にまたがる天井の高い空間を言います。部屋全体を吹抜けとするだけでなく、空気の循環をうながすために小さな吹抜けを設けることもあります。新築時に吹抜けとしておき、将来2階を増床する使い方も可能です。

メリット：①空間の広がり感の向上。②上下階の視覚的連続性の確保。③上下階の通風・空気循環の促進。④高窓を設けることにより、下階や室の奥への導光の促進。

留意点：暖房時に室内の上下温度差が大きく異なる傾向があり、放射式暖房の利用等の配慮が必要です。家全体に音が伝わりやすいことにも配慮が必要です。



●（京町家） 通り土間の吹抜け。採光と換気の機能を担っている

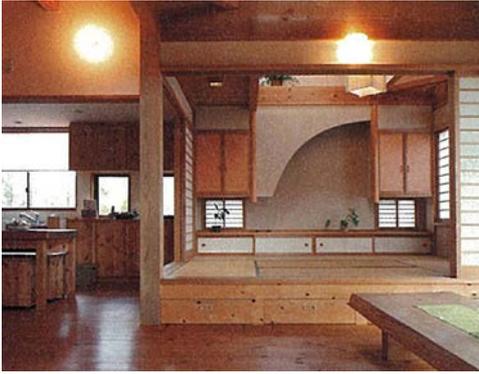


●（現代の住まい） 空気の循環を目的とした小さな吹抜け（写真：⑥）



●（現代の住まい） 吹き抜けを介して家全体がひとつながりで一体感を感じられる住まい

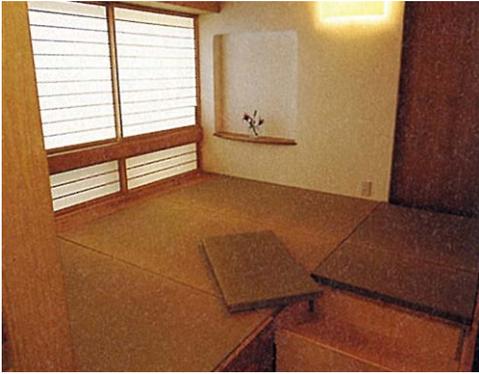
3.6 ゆか



● (2面が板の間に面した畳の間) 間仕切りの障子は3/4開放でき、一体感、連続性が大きい (写真: ①)



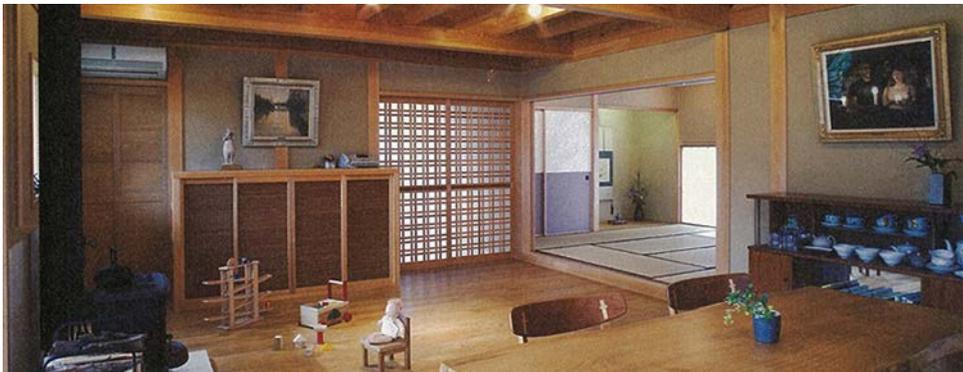
● (縁なしの畳) 半畳縁なしの畳はニュートラルな雰囲気、洋間的な用途にも使いやすい (写真: ①)



● (下部収納の畳) 下部を収納に利用。畳はオーダーメイドなので自由な大きさがつくれる (写真: ①)



● (畳ベッド・集合住宅) 小上がり、ベッド、ベンチ等畳は多様なしつらえに適用できる (写真: ⑤)



● (子供の遊び場としての板の間) 弾力性のある樹種を選ぶと、小さい子供の遊び場としても安心 (写真: ①)



● (床座の板の間) 温かみのある樹種を用い、椅子座と床座を両立する空間をつくる事が可能 (写真: ①)



● (床板の反射) 塗装の種類、色によっては光を柔らかく反射して、部屋全体を明るくする (写真: ①)

畳 (和室)

たたみ わしつ

畳は日本の住まい、和室を象徴する床の仕上げ材料です。元来、心材(畳床)は稲わら、表面材(畳表)はい草を材料とする、調湿性能のある自然素材です。

メリット: ① ごろごろしたり、床座の生活、子育て、洗濯物の仮置き等の家事室としての活用、客間として用いる等多様な使い方に対応できる。② 茶道、華道、礼法、着付け等、和の立ち居振る舞いや活動のための場として欠かせない。

留意点: 本畳を入れる場合は、根太下げ等に配慮する必要があります。またメンテナンスの容易さ、耐久性等、畳の種類ごとの特性を踏まえた手入れが必要です。

板の間

いたのみ

木板を張った床で、樹種、板厚、板の間及び塗装の種類等は様々です。無垢板は柔らかく、温かみのある触感です。

メリット: ① 無垢板の肌触り(柔らかさ、温かみ)。② 汚れ落としや傷の補修が比較的容易(削り込み等)。③ 素地仕上げ等、塗装の種類によっては吸放湿性や反射性がある。

留意点: 経年で縮み継ぎ目が広がる、季節ごとに吸放湿し伸縮、床鳴り等が生じる等があり注意を要します。床暖房には対応する床板材を用います。また、触感の良いものほど傷や汚れがつきやすいため、バランスを考えた選択が必要です。

土間

どま

土間は、元来、土や三和土（たたき）等で仕上げられた床で、現代ではタイル、瓦等を敷き込むこともあります。室内空間ですが、戸外的利用も含め多用途に利用できます。

メリット：①外部との連続性が高く、外部のものや動物を持ち込める内部空間として多用途に利用可。②床レベルを室内より低くすることで、室内の床座と土間の椅子座で視線の高さを揃えられる。

留意点：使い方を具体的にイメージして、土間と内外部の連続性や配置・大きさ・仕上げ等を計画する必要があります。単なる通路や物置にならないよう配慮しましょう。



●（現代の住まい）シンク・レンジを仕込んだテーブルでダイニングとして用いられる土間（写真：①）



●（集合住宅）バルコニーに面するリビングの一部を土間にした例（写真：①）

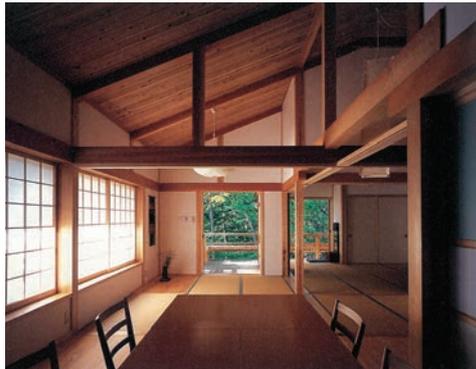


●（現代の住まい）玄関から連続する土間空間。自転車の収納やおしゃべり等の趣味に利用（写真：①）

3.7 内部意匠



●（現代の住まい） 落ち着きと温かみを持たせた真壁の部屋を洋間として使用



●（現代の住まい） 真壁と障子の意匠による、ダイニング・和室の一体感のある雰囲気（写真：①）



●（現代の住まい） 真壁造りで全体を和風の雰囲気に整えた例



●（現代の住まい） 土間と座敷の間の大黒柱。畳を切り欠かないよう敷居位置をずらしている（写真：①）



●（現代の住まい2） 板の間における大黒柱。吹抜けと組合せ、視覚的に2階にもつながる（写真：①）



●（現代の住まい） 畳の間と板の間の間の大黒柱。リビング・ダイニングの中心に配置（写真：①）

真壁

しんかべ

柱や梁等の構造材を表に見せる壁のつくり方を言い、構造材以外の部分は土壁や面材を下地とし、塗り壁・壁紙等で仕上げます。構造材を見せない大壁に比べ、構造材の状態が容易に分かります。

メリット：①木の温かみを感じられ、時とともに色に味わいが増し愛着も深まる。②木材が外面し常時空気に触れていて劣化しにくいので、構造体が長持ちする。

留意点：大壁に比べて壁の厚さが薄くなるため、断熱性能を確保するためには、断熱材の選定に配慮が必要です。外壁を真壁にする場合は、雨掛かりにならないような配慮も必要です。

大黒柱

だいこくばしら

大黒柱は、元来民家の平面の中央付近の構造上重要な太い柱で、家格の象徴として設けられました。最近でも家族やその集いの象徴する太い柱を「大黒柱」としてリビング等に設ける例も見られます。

メリット：①家の中で唯一の太い柱として独特の存在感を持ち、家族の集いの中心となる場を形成。②内部空間の意匠のメリハリや個性を表現。

留意点：周囲の柱よりも太い断面の部材のため、梁や建具、床仕上材などのプロポーションやバランスに配慮が必要です。意匠性に加え、梁との接合による柱の断面欠損を考慮した断面寸法とします。

3.8 装い

床の間

とこのま

座敷の床の間は、構成要素や形式が決まっていますが、最近は自由な発想の床の間や花や季節のものを飾る場所を、様々に工夫して設ける事例が増えています。

メリット:①書画や写真、花、置物、また家族の写真や作品等を飾ることは、暮らしの中にゆとりや彩りをもたらす。②室内で四季の移ろいを感じさせる。③家族の絆を確かめる等、暮らしの心の部分を満たす場となる。

留意点:スペースに余裕がなくても、壁をものが貼れる仕様にしたたり、薄い奥行きでも何か飾れる場をつくる、という手間や工夫が重要です。



● (現代の住まい) 定型に近い床の間 (写真: ①)



● (現代の住まい) 床の間背後に地窓を設け、外の眺めを借景とした飾り棚スペースとしている



● (現代の住まい) 玄関の正面に床の間風の飾り棚が設けられている (写真: ①)



● (現代の住まい) 階段の隔て壁を利用した飾り棚。階段に合わせて段状になっている (写真: ①)

仏壇・神棚

ぶつだん ・ かみだな

住まいの中の礼拝及び祖先を祀るスペースで、家族の大切な思い出を顧みる場でもあります。住まいの中にこうした場を設けるのは、日本の文化です。宗派ごとの定式の他、最近は自由な発想の仏壇もつくられています。

メリット: 日常の暮らしの中に、家族の心のよりどころを確かめるための場をつくることができます。

留意点: 仏壇や神棚は、新築時には不要でも将来望まれることもあるため、予め設置スペースを確保しておく (当初は収納等に利用) 配慮も必要です。また、仏壇や神棚をどのように見せるかへの配慮も必要です。



● (現代の住まい) リビングに連続する和室に仏壇を設えた例。(写真: ①)



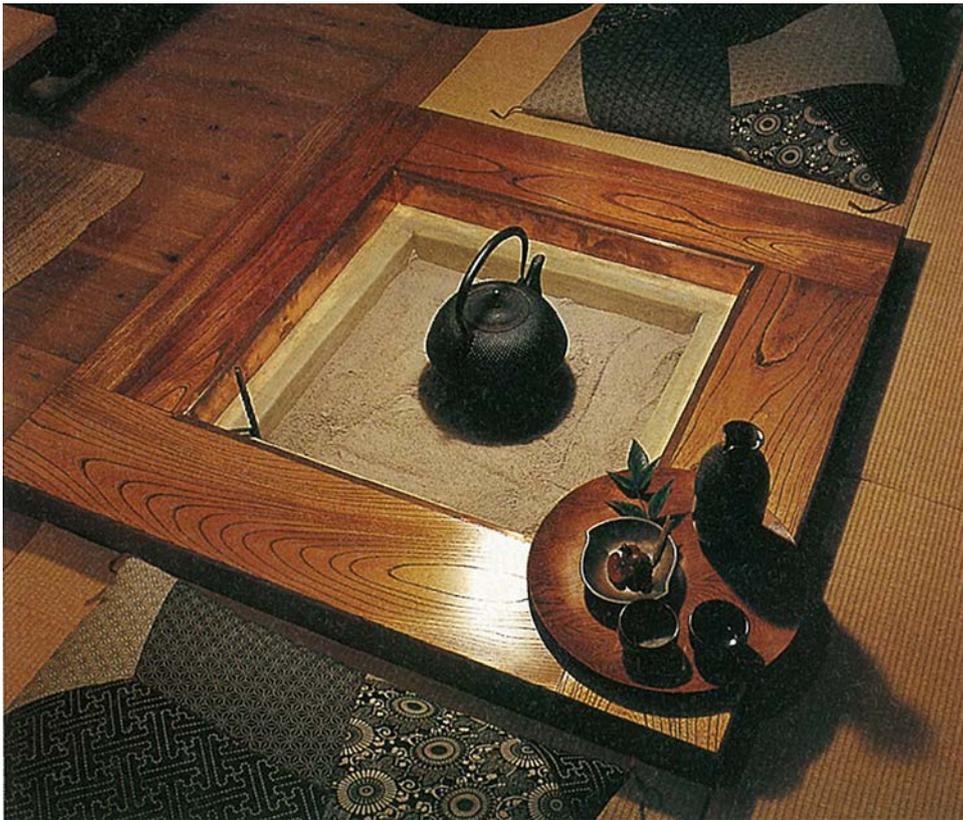
● (現代の住まい) 押入上部の神棚。神棚は壁面から持ち出しが多いが、専用スペースを確保 (写真: ①)



● (現代の住まい) リビング隣の和室に仏壇収納を設置。建具を閉じると仏壇は隠れる (写真: ①)



● (現代の住まい) リビングの掃き出し窓上部の棚板を、さりげなく神棚としてしつらえた例 (写真: ①)



● (囲炉裏) 周縁部にもものを置ける板をまわした囲炉裏(写真:①)

囲炉裏

いろいろ

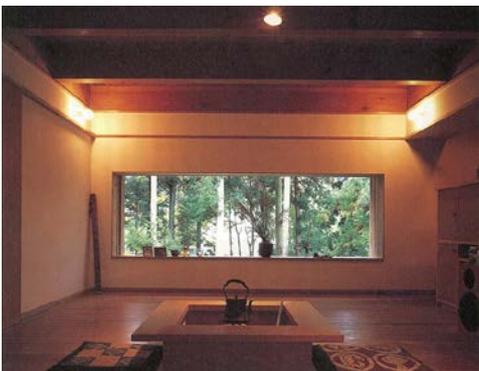
住宅内の床面を切り下げてつくられた炉で、調理・食事、採暖のために設けられます。最近では囲炉裏は少なくなりましたが、火を利用する例として、炉を組込んだ座卓、薪ストーブ等が見られます。

メリット: ①火のもつ象徴性は、家族や来訪者との調理作業・食事、くつろぎの中心の場の形成に相応しい。②炭火による調理上の効果。③輻射熱による採暖。

留意点: 火災防止や小さな子供等の安全面、十分な換気等への配慮が必要です。囲炉裏、薪ストーブを設置した部屋は火気設置室として法規制が掛かります。



● (座卓の炉) 囲炉裏を床座の生活に組み込んだ例。炉に蓋をすれば普通の座卓としても使える (写真:①)



● (座卓の炉) 洋間に置かれた炉のある座卓 (写真:①)

3.9 素材

土壁

つちかべ

土壁とは、小舞と呼ばれる竹や木で組んだ格子を下地とし、土を塗り重ねた壁を言います。日本の伝統的な壁工法で、仕上げには漆喰や聚楽土等が用いられます。

メリット：①防火性能が高い（40mm以上で防火構造）。②吸放湿性能があり室内の湿度を快適に保つ。③蓄熱性能があるため冬は一度温まると冷めにくい。④職人の手作業による美しい風合い。⑤自然素材のため廃棄後も土に還る。

留意点：土の断熱性は高くはないため、断熱材との併用が必要です。また、乾式工法の壁に比べ、工期もコストも掛かることに注意が必要です。



●（土壁断面）小舞を組み、何層にも土を塗り重ねてつくる



●（現代の住まい）土壁の風合いを生かしたインテリア（写真：①）



●（現代の住まい）土壁の風合いを生かしたインテリア（写真：①）

自然素材 地域産材

しぜんそざい ちいきさんざい

住宅に使われる自然素材には、木・紙・土・石・竹等様々なものがあります。住宅を建てる地域で調達される材料は地域産材と呼びます。

メリット：①工業製品に比べ、製造や廃棄時に排出されるCO₂が少なく環境にやさしい。②時間が経つにつれて味が出る（経年美化）。③輸送に掛かるコストやCO₂排出量を抑えることができる。④地域の森林の保全育成・地域経済の活性化等に寄与する。

留意点：無垢の木材は経年により若干のそりや割れが発生することがあり、事前に住まい手に特性を説明し、理解していただくことが大切です。



●（現代の住まい）地域材（金山杉）と漆喰、畳、和紙等の自然素材でつくる健康的な住まい（写真：⑥）



●（現代の住まい）木の柱・床板・畳・障子・襖で構成し、時間が経つにつれて味が出る（写真：①）



●（現代の住まい）地域に残る民家を改修した住まい。自然素材を多用（写真：⑥）

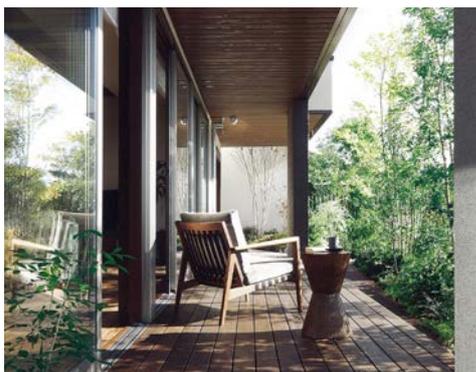


●（現代の住まい）室内を暖かい雰囲気を感じさせる和紙の壁紙（写真：①）

3.10 戸外



●（現代の住まい）室内から濡れ縁、外部に至るつながり（写真：①）



●（現代の住まい）深い軒下の濡れ縁（ウッドデッキ）。室内の延長として広がりを与える（写真：②）



●（現代の住まい）ウッドデッキを外での食事の場、ホームパーティーの場として利用（写真：①）



●（集合住宅）集合住宅のバルコニーも濡れ縁のひとつの形式と言える（写真：③）



●（現代の住まい）3方の部屋から眺められる緑豊かな中庭（写真：②）



●（現代の住まい）室内と連続性の高い中庭（写真：①）



●（現代の住まい）玄関の正面に坪庭を設けることで、明るく開放的な玄関を演出（写真：①）



●（集合住宅）集合住宅に設けられたコミュニティスペースとしての中庭（写真：③）

濡れ縁

ぬれえん

濡れ縁とは、建物の外部に設けられる雨ざらしの縁側で、木板や竹等で作られました。現代のウッドデッキ同様、室内の延長として利用できます。

メリット：①建物と連続することにより室内空間に広がりをもたせ、②外での食事や夏の夕涼み、秋のお月見等季節に応じた様々な使い方、③町家等ではご近所の方との日常の交流の場（ぼったり床几に類する可動方式もある）。

留意点：濡れ縁の木部は腐朽しやすいため、軒を深くして雨掛りを軽減する、耐久性の高い木材を使用する、木材保護塗料を塗る等の配慮が必要です。

坪庭・中庭

つばにわ ・ なかにわ

坪庭や中庭は、かつての町家によく見られ、採光・通風・鑑賞等を目的として設ける、建物に囲まれた小さな庭を言います。

メリット：①奥行が深い敷地や建物に自然の光と風を呼び込む。②植栽により室内から季節感を楽しむことができる。③坪庭・中庭を挟んで部屋がつながり、家族同士の程よい距離感が保たれる。

留意点：敷地や建物面積に多少のゆとりが必要です。また、中庭に面して窓を集約し、周囲に対して壁ばかりを設けた住まいは、閉鎖的な印象を与えます。

植栽

しよくさい

植栽は、鑑賞や修景以外に、日射遮蔽・防風・材木・食料（果実等）・燃料（薪）等の確保等、様々な目的で植えられます。

メリット：①落葉樹は夏の日差しを遮り冬の日差しを取り込むため南側に植えると有効。②常緑樹は生垣や防風に利用。③花や実のなる樹木は四季の移ろいを感じさせ、鳥等を招く。④通りに面した生垣やシンボルツリーは道行く人の目を楽しませ、まちなみ・景観を整える。

留意点：庭が狭く十分な植栽面積が確保できなくても、プランターや壁面緑化等、様々な工夫で緑を施しましょう。



●（アプローチの植栽）住宅のアプローチや境界部の植栽。地域の景観向上にも貢献（写真：①）



●（カーテン状の植栽）日射遮蔽のためのよしずの役割を担う、つる性植物による緑のカーテン（写真：⑦）



●（街角の植栽）夏期の日射を遮るとともに、街角の景観を整える植栽（写真：⑦）



●（庭の植栽）室内から鑑賞できる植栽。風上の植栽は風の温度を下げる効果がある（写真：②）

前庭

まえにわ

民家の前庭は、人を迎える導入のスペースであるとともに、地域のコミュニティに開放され、半公共的な機能をたせることもありました。現代においても、ポーチのつくりを工夫して近所づきあいや防犯に役立てたり、駐車場を子供の遊び場に転用したりすることができます。

メリット：①日常の中のおしゃべり等近所づきあいの場の確保。②近隣相互の視線の通りやすさによる防犯性の向上。③駐車場等前庭を隣戸で一体化、オープン化し地域の小広場として有効活用。

留意点：コミュニティ形成上、近隣の方と話し合い、連携してつくるのが重要です。



●（伝統的な民家）落ち着いた趣の前庭（写真：①）



●（現代の住まい）日中は遊び場にもなる住宅アプローチ部分の駐車場スペース（写真：①）



●（現代の住まい）通りすがりに立ち寄っておしゃべりのできるポーチ（写真：①）

3.11 配置

建物配置

たてものはいち

建物の配置の工夫により、季節風に対応したり、密集市街地の採光・通風を向上させることができます。

メリット：①富山の砺波平野の散居村には、アズマダチと呼ばれる伝統的な民家形式が発達してきました。風の弱い東（アズマ）側に玄関や美しい真壁の妻面を向け、雨風の強い西側は大壁で開口部をほとんど設けません。季節風から、建物



●（アズマダチ）風の弱い東に向けて建つアズマダチ、西側には屋敷林（カイニヨ）を植樹（富山）



●（町家の坪庭）町家の坪庭の配置を近隣と協調することで、採光・通風を確保し合う

と暮らしを守る知恵と言えます。

②町家は集まって住むため

の知恵の宝庫です。建物や坪庭の配置は、街区内でほとんど同じ位置に協調して

設けられます。これは住宅への採光や通風を守るための暗黙のルールと言えます。

参考文献一覧

住まい・住文化に関するもの

- | | |
|-----------------------------|---|
| 1. 『日本人の住まい』 | E.S. モース (株)八坂書房 1886年(原典初版)/2004年(新訳版) |
| 2. 『日本人の住まい 住居と生活の歴史』 | 稲葉和也・中山繁信 (株)彰国社 1983年 |
| 3. 『住まいの人類学』 | 大河直躬 (株)平凡社 1986年 |
| 4. 『家屋と日本文化』 | J.P. マサビュオー (株)平凡社 1996年 |
| 5. 『すまいの歳時記—伝承の暮らしとしつらい—』 | 清家清監修 (株)講談社 1985年 |
| 6. 『和風の住まい術』 | 山口昌伴 (株)建築資料研究社 1994年 |
| 7. 『住まいを読む 現代日本住居論』 | 鈴木成文 (株)建築資料研究社 1999年 |
| 8. 『草庭』 | 堀口捨己 (株)筑摩書房 1985年 |
| 9. 『加藤周一著作集(20) 日本美術の心とかたち』 | 加藤周一 (株)平凡社 1997年 |

民家に関するもの

- | | |
|---------------|---------------------------|
| 1. 『日本の民家』全8巻 | (株)学研 1980・1981年 |
| 2. 『日本列島民家入門』 | 宮澤智士 INAX 出版 1993年 |
| 3. 『民俗建築大事典』 | 日本民俗建築学会編 柏書房(株) 2011年 |
| 4. 『民家は生きてきた』 | 伊藤ていじ (株)美術出版社 1963年 |
| 5. 『日本の民家』 | 伊藤ていじ・二川幸夫 (株)美術出版社 1962年 |
| 6. 『日本の民家』 | 今和次郎 (株)岩波書店 1989年 |

伝統的技術に関するもの

- | | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 1. 『民家のしくみ 環境と共生する技術と知恵』 | 坊垣和明 (株)学芸出版社 2008年 |
| 2. 『民家の自然エネルギー技術』 | 木村建一 (株)彰国社 1999年 |
| 3. 『住まいの伝統技術』 | 安藤邦廣・乾尚彦・山下浩一 (株)建築資料研究社 1995年 |

日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会名簿 (所属・役職等は平成24年8月現在)

委員長	小林秀樹	千葉大学大学院工学研究科 教授
委員	在塚礼子	元埼玉大学教育学部 教授
	内山和哉	積水ハウス(株) 技術部長
	鎌田宜夫	NPO 住宅・建築・都市政策支援集団 常務理事
	川合通裕	野村不動産(株) 住宅カンパニー 商品開発部長
	後藤 治	工学院大学建築学部 教授
	島原万丈	(株)リクルート住宅総研 主任研究員
	坊垣和明	東京都市大学都市生活学部 教授
	安野明男	(独)都市再生機構本社 技術調査室 ストック再生設計チームリーダー
	山下武秀	(株)風土社 代表取締役
	オブザーバー	加古貴一郎
上森康幹		国土交通省住宅生産課 木造住宅振興室 企画専門官
宮脇 慈		国土交通省住宅生産課 木造住宅振興室 企画生産係長
岩村公隆		経済産業省製造産業局 住宅産業窯業建材課 課長補佐
高橋淳子		経済産業省商務情報政策局 生活文化創造産業課 日用品室・伝統的工芸品産業室 室長補佐
舩屋桂一		経済産業省商務情報政策局 日用品室 室長補佐
事務局	(財)日本住宅総合センター	
	(株)アルセッド建築研究所	

No.11816

今に生きる日本の住まいの知恵
わが国の気候・風土・文化に根ざした
現代に相応しい住まいづくりに向けて

日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会
事務局：公益財団法人 日本住宅総合センター
編集協力：株式会社 アルセッド建築研究所

発行日：2014年6月11日

発行所：公益財団法人 日本住宅総合センター
〒102-0084
東京都千代田区二番町6番地3
二番町三協ビル5階
TEL：03-3264-5901

印刷：株式会社 秀巧堂クリエイト

定価（本体850円＋税）

ISBN 978-4-89067-816-7 C3052

©2014 無断転載を禁じます。落丁・乱丁本はお取替えいたします。



9784890678167



1923052008505

ISBN978-4-89067-816-7
C3052 ¥850E

定価（本体850円+税）

日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会
（事務局 公益財団法人日本住宅総合センター）